

わずかな平坦面を有し、弥生時代の集落址が確認されている。古墳は12基が確認されており、そのうち6基の発掘が行われた。弥生時代の後期初頭の3基の方形周溝墓（マウンドをもつ）を含み、他の3基は後期古墳である。報告された古墳は3基のうち1基である。

庚申塚6号墳は径16.8m程の円墳。周堀が一周するが、明確でない。墳丘中央部封土内に2基重複した土壌が検出された。ともに主軸をほぼ東西にとる。1基は長さ3.58m、幅0.8~0.9mをはかり、直刀、鉄鏃7を出土。

大山台1号墳

大山台丘陵のほぼ中央に位置する。大山台は標高50m、東西100~120m、南北600m程の台地で、古墳25、方形周溝墓12が確認された。調査古墳は14基で、すべて後期古墳、方形周溝墓は7基で、古墳は9基のみ報告がある。

径16.2mの円墳。幅2m程の周堀が一周する。内部施設は封土中に2基重複して存在する土壌。ロームブロック層を掘り下げ構築される。両者ともほぼ東西方向を主軸とし、北土壌は長さ3.90m、幅0.55mをはかり、粘土の散布が認められる。南土壌の長さ2.55m、幅0.58m。南土壌より直刀1、鉄鏃が出土。

大山台4号墳

大山台丘陵の東辺に位置する。西側が切断されており、径8.5m程の不整形円形を呈す。幅2.3~2.5mの周堀が一周するらしい。内部施設は墳丘中央よりやや南側の封土内に築かれた土壌。ほぼ東西の方向をとる。少量の粘土が土壌の輪郭を表わすように散布。出土遺物なし。

大山台5号墳

4号墳の南に隣接する。径23m、高さ3m弱の円墳。幅3.6~4.3mの周堀が一周する。内部施設は墳丘中央封土内に掘りこまれた土壌で、5基がほぼ平行にならぶ。西南に主軸をとり北から1号、2号、5号、3号、4号主体と命名。構築時期に前後があるとされ、1と5、2と3、4のグループに分けられるとされる。1号主体は、長さ5.3m、幅2.9mの隅丸長方形の掘り方中央に位置する長さ3.4m、幅0.9~1.1mの土壌。東部に革袋入刀子2、大刀子1、西に数グループの鉄鏃、刀子1が出土。2号主体は長さ3.6m、幅0.75~0.83mの土壌。中央部南壁寄りから直刀1、大刀子1、碧玉製管玉11、ガラス勾玉1、ガラス小玉4、西端より鉄鏃数本が出土。4号主体は長さ3.45m、幅1mの長方形箱形の土壌。5号主体は長さ5m、幅2.1mの隅丸長方形の掘り方中央に位置する長さ3.65m、幅1.7mの土壌。

大山台6号墳

大山台丘陵の中央部、1号墳の北方に位置する。径12.8m、高さ0.5mの円墳。幅1m前後の周堀がめぐる。内部施設は墳丘中央部、主軸方向を北西にとる旧表土を掘りこんだ二段開鑿の土壌。長さ1.60m、幅0.55mをはかる。粘土が少量散布。中央部西壁際で砥石1、鉄鏃2が出土。

大山台14号墳

大山台丘陵西端部に位置する。径19.2m、高さ2.25mの円墳。幅3mの周堀がめぐる。内部施設は墳頂部封土内に3基並列して存在する。主軸はほぼ東西方向をとる。北主体は長さ3.29m、幅0.98m、鉋1を出土。中央主体は長さ2.74m、幅0.8~0.96m、中央部で直刀1が出土。南主体は長さ2.65m、幅0.92mの土壇。直刀1、刀子1、鉄鏃、耳環1、土玉3が出土。

大山台15号墳

大山台丘陵の西辺、14号墳の南に位置する。径約20mの円墳。幅2.5mの周堀がめぐる。内部施設は墳頂下0.7m、ほぼ東西に主軸をもつ土壇。長さ約2.5m、幅1mをはかる。直刀1、大刀子1、刀子3、鏃が出土。また墳頂部で提瓶1が出土し、墳丘下旧表土面からは鏃1、須恵器杯1、土師器杯11、壺2、甕数個、手捏ねの小形土器等が一括出土した。内部施設が祭祀的な特殊遺構の可能性がある。

大山台21号墳

大山台丘陵中央部に位置する。径約23m、封土高1.4m弱をはかる円墳。幅3.6~4mの周堀がめぐる。内部施設は墳丘中央部封土中、ほぼ東西に主軸をもつ土壇。長さ3.8m、幅0.7mをはかる。出土遺物は直刀1、大刀子1、鉄鏃数個、管玉9、ガラス玉69がある。

大山台24号墳

21号墳の南に隣接する。墳丘封土はかなり削平されていたが幅2.5mの周堀の検出から、径18.2mの円墳と判断された。さらに内側に幅約1mの周堀が確認され二重の古墳（拡大された古墳）と報告されている。内部施設は径12m程の古円墳に伴うもので、北西の方向を向く封土中に築かれた長さ約2.4m、幅0.4mの土壇。刀子1、銅玉1、管玉9、勾玉1、切子玉1が出土。

大山台27号墳

大山台丘陵の東辺に所在し、東側はゆるやかな傾斜となる。径12m、高さ1.5mの円墳。幅2~2.6mの周堀がめぐる。内部施設は墳丘中央部封土内に東西に主軸をもつ長さ3.15m、幅0.7~0.85mの土壇。中央部東よりで直刀1、鉄鏃1群、青銅製丸玉8、碧玉製管玉10、ガラス玉4が出土。

山伏作1号墳

大山台丘陵の南西につづく台地上に古墳、方形周溝墓約20があり、山伏作古墳群と称された。群は1号墳を中心とする東側の支群と、5号墳を中心とする南側の支群とにわかれる。古墳10、方形周溝墓1が調査された。報告された古墳は6基のみ。1号墳は台地の西辺に立地する前方後円墳。墳丘長42m、後円部径23.2m、前方部幅14mをはかる。当初後円部のみを築き、くびれ部封土下にも周堀をめぐらす。前方部は地山を削り出して形成されている。墳丘相以形の周堀がめぐる。幅は6m程をはかる。内部施設、遺物は未検出。

山伏作4号墳

一辺13.2mをはかる方墳。幅2.6mの周堀がめぐる。周堀内側は2段になり、中間にせまい

テラスをつくる。墳丘中央にはほぼ東西に主軸をもつ土壇を検出。長さ2.7m、幅0.92mをはかり、内部に長さ2.1m、幅0.6mの木棺痕が認められた。内部施設出土遺物はなく、周堀等から須恵器杯蓋3セット等が出土。

山伏作5号墳

一辺13.5m程の方墳。周堀は二重にめぐり、内周堀は幅1.4～2mをはかり、1.5m程のテラスをへだてて幅0.8～1.3mの外周堀がめぐり、墳丘中央から南に開口する両袖式横穴式石室を検出。攪乱、盗掘はうけていないと判断される。旧表土上に構築され、内周堀まで墓道がつづく。石室全長6.7m、奥壁幅1.15m。玄室側壁は軟質砂岩の互目積。多少持送りを呈する。プランは長方形。入口部はカマチ石、門柱、閉塞石各1枚で構成される。玄室内から須恵器、土師器が3群に分かれ検出された。この3群に囲まれた部分に木棺が置かれていたと推測される。土師器杯3、須恵器杯蓋のセット8、長頸壺6、俵瓶1、甕2が出土。

山伏作6号墳

北辺10m、南辺11m、東、西辺8.7mの方墳。周堀は幅1.9～2m、深さ0.5mをはかる。墳頂部で鉄鏃数片が検出されたので、木棺が直葬されていたと推測される。

山伏作7号墳

すでに北西部が削平されていたが、径17.5mの円墳で、幅2～2.6mの周堀がめぐることが判明。内部施設は墳頂部に存在した木棺直葬施設と推測されるが、削平されたため未検出。

以上、昭和49年、相山林継調査。宅地開発に伴い湮滅。資料は木更津市教育委員会保管。

山伏作A-1号墳

一辺7m程の二重周堀の方墳。内周堀1.2m、テラス2m、外周堀0.7mをはかる。外周堀外壁の一辺は12m、封土は削平されほとんどない。内部施設は墳丘の中央北寄り、地山下に掘りこまれた東西に主軸をもつ土壇。全長6.6m、幅1.6m程の長方形を呈し、須恵器高台付杯2等を出土。

鹿島塚20号墳

矢那川の南岸台地上に墳丘長80mの前方後円墳（鹿島塚14号墳）を含む15基からなる古墳群が所在し、鹿島塚古墳群と称された。調査されたのは20号墳のみ。

古墳群の北西端に位置する。径約21m、高さ2mの円墳で、幅3.5mの周堀がめぐり、内部施設は、墳頂封土下約1m、ほぼ東西に主軸をもつ長さ6.2m、幅1.8mの掘り方内の長さ4.62m、幅0.45mの木棺痕で、小口部に粘土を充填する鉄剣1、刀子2が出土した。

以上2基、昭和48年、千葉県都市公社文化財調査事務所（種田斎吾）調査。後湮滅。資料は房総風土記の丘資料館保管。

鹿島塚14号墳

矢那川中、下流域の大半を見わたせる丘陵先端の尾根上に占地する。前方部が西面した前方後円墳で、墳丘長80m、後円部径50m、同高さ8m、前方部幅50m、同高さ5mをはかる。攪

乱、盗掘はうけておらず、内部は未調査である。墳丘形態、立地からみてかなり古い時期の古墳と推測される。

庚申塚方形墳群

庚申塚古墳群と重複、あるいは隣接して存在。

1号方形墳

溝の北辺長11.9m、幅1～1.5m。南辺長12.6m、幅0.8～1m。東辺長11.7m、幅1.2～1.3m。西辺長12m、幅1～1.6m。東南隅にブリッジを有す。台状部は東西12.5m、南北12.3mをはかる。内部施設は、東西に主軸をとる木棺で2.1×0.95mをはかり、3.2×2.1mの掘形を二段に掘り窪めて構築される。棺内東端から碧玉製あるいは凝灰岩製の玉が11、鉄石英製管玉8、コパルトブルーのガラス丸玉10、他に玉類4が出土。その西位置でガラス玉31点が出土。各周溝隅から弥生時代後期の土器が出土したが、特に北西隅のものは底部穿孔される。

2号方形墳

見かけの墳丘は径15mほどの円墳状、北溝の長さ約13m、南溝12m、東溝12m、西溝13.3m。台状部の対角約北西～南東19.25m、北東～南西16m。溝の幅は約1mをはかる。内部施設は長径3.8m、短径2.5mの土壇で木棺の幅は約0.85mほどをはかる。中央からやや南東の部分で検出された棺内から勾玉3、ガラス小玉128が出土。

3号方形墳

東西約10m、南北8.5～9mをはかる。北溝中央、北西隅、南西隅は削平される。溝の幅は0.9～1m。内部施設及びそれにとまなう遺物は検出されなかった。

大山台方形墳群

大山台古墳群と重複、あるいは隣接する。

7号方形墳

一辺約11m。溝の幅は1～1.5mをはかる。内部施設は墳丘中央部で南北に主軸をとる土壇。長径3.75m、短径1.9m、深さ約0.1mの掘り方の中に、長さ2.55m、幅0.84m、深さ0.2mの木棺痕が存在する。棺内からの出土遺物はない。周溝内から小形壺が出土し、北溝からは底部穿孔の土器出土。

8号方形墳

調査前は、径10m、高さ0.5mほどの円墳状を呈していたが、北溝の長さ9.4m、東溝9.6m、南溝9.4m、西溝9.8mの方形を呈す。0.6mほどの盛土を確認できた。溝の幅は1.4～1.8m。内部施設は中央よりやや西に位置する。長辺1.94m、幅0.65mの土壇。棺内より蛇紋岩製管玉1、水晶玉1、ガラス玉18が出土。溝からは底部穿孔の土器が出土。

10号方形墳

調査前は一辺約13m、高さ0.6mほどの方形の墳丘を確認。周溝の調査により一辺約10m、幅約1.6m、深さ約0.9mの大きさをはかる。内部施設及びそれともなう出土遺物はなし。

11号方形墳

調査前は一辺8m、高さ0.4mほどの方形の墳丘を確認。周溝の調査により一辺約9m、幅約1m、深さ0.6～0.7mの大きさをはかる。内部施設と思われるものは検出されなかったが、墳丘から小形壺、椀、周堀から完形の杯が出土。

12号方形墳

調査前は一辺約8m、高さ0.6mの方形の墳丘を確認。周溝の調査により、一辺約10m、高さ約2mの方形墳を検出。溝の幅は約1m、深さ0.8m、墳頂部西側で小判形の落ち込みを2か所検出。落ち込みの周辺には粘土の散布がみられた。出土遺物はなし。

16号方形墳

調査前は径約10m、高さ約0.2mの円墳を確認。溝の調査により一辺約8mの周溝を検出。墳丘の高さは周溝底から1.6m。溝の幅は約1.5mをはかる。内部施設及びそれともなう出土遺物はなし。

32号方形墳

南西溝約10mの方形を呈すと推定、溝の幅は約1.9mをはかる。周溝内から須恵器が出土した。内部施設及びそれともなう出土遺物はなし。

山伏作方形墳

山伏作古墳群と重複、あるいは隣接する。

9号方形墳

調査前は一辺15m、高さ0.6mの方形の墳丘を確認。周溝の調査により東西12m、南北10mの大きさと判明。墳丘の高さは周溝底から2m。周溝の幅は0.5～1mをはかる。内部施設は、墳丘のほぼ中央で東西に主軸をとる土壇で、長さ2.55m、幅1.1mをはかる。内部施設からの出土遺物はなし。周溝内から、和泉式土器が出土。

大山台方形周溝墓群

大山台古墳群と重複、あるいは隣接して存在する。

51号址

北溝の西側を住居址によって切られている。北溝の長さ約6.3m、南溝約7m、東溝約6.5m、西溝約6.6mの方形を呈し、溝の幅は0.8～1mをはかる。内部施設は未検出。

52号址

北溝の長さ約5.5m、南溝約5.15m、東溝約5.4m、西溝約5.4mの方形を呈し、溝の幅は0.55～0.75m、深さ約0.3mをはかる。内部施設及びそれともなう出土遺物はなし。

53号址

北溝の長さ約5m、南溝約4.95m、東溝約5.3m、西溝約6mのゆがんだ方形を呈す。内部施設とされるものは中央部の西よりに検出されたが、西側周溝の一部にまで達するという。長さ2.9m。幅0.48mをはかる。

54号址

東、南、北溝の内側の長さ3.5m、溝の幅は0.43~0.65mをはかる。内部施設及びそれともなう出土遺物はなし。

55号址

東側半分を9号墳によって破壊される。西溝の長さ8.5m、幅1m、北溝の幅2mをはかる。内部施設は中央部やや北側で検出。長さ1m、幅0.4mの大きさで、周囲に粘土をしきつめている。出土遺物はなし。

56号址

7号墳に切られる。北溝の長さ6m、南溝6m、東溝7.6m、西溝8m。溝の幅は0.55~1.15mをはかる。内部施設及びそれともなう出土遺物はなし。

57号址

約3分の1は削平される。西溝の長さ7.3m、現存北溝8.8m、現存南溝5.5m。溝の幅は0.5~0.6m、深さ0.4~0.5mをはかる。内部施設は台状部のほぼ中央部で検出。掘形、2.5×0.98m、木棺の大きさ1.8×0.48mをはかる。木棺内より鉄釘と刀子が出土。

[16. 市原市]

新皇塚古墳 市原市菊間字北野 (235・254)

村田川の河口南側を屈する台地上の突端に所在。菊間古墳群中の1基であり、群中最北に位置する。裾部の四周をかなり大きく削平されており、最も残りの良い北区で一辺22m程が遺存。墳丘は明らかな方墳で、各辺は正しく東西南北を向く。東辺で幅9m、深さ0.6~0.7mの周堀を検出。高さは約7m。両コーナーをつかみ、内壁の一辺40mと判明。一辺40mの方墳と見るべきだが、里人の記憶によれば、西側に小山がつづいていたともされ、前方後方墳の公算も高い。封土を旧地表から約3.8mの所でいったん水平にならし、内部施設を付設。主軸を東西にとる粘土槨で、2基の木棺を蔵す。粘土の範囲は長さ13.9m、幅3.8m。南棺は長さ5.98m、幅0.95m、北棺は長さ10.75m、幅0.8m、南棺が北棺に先行するという。南棺からは珠文鏡1、鉄剣1、鉄刀1、刀子1、鑿1、鉞2、鎌1、鉄斧1、管玉1、ガラス玉1が出土、棺の中央部には朱の散布がみられた。北棺内からは内行花文鏡1、石釧1、水晶製勾玉1、琥珀製勾玉1、管玉94が出土。北棺の棺外側部の粘土中から鉄剣1、刀子片(?)7、錐1、鉞1、鎌2、打ちグワ1、鉄斧1が出土。朱の散布もみられた。

昭和49年、県営住宅建設に伴い千葉県都市公社文化財調査事務所(齊木勝)調査。後湮滅。

資料は房総風土記の丘資料館保管。

小田部古墳 市原市小田部字向原(194)

村田川の支流が形成した開析谷の最奥部に所在。水田からの比高約30m。南北、東西トレンチによる調査により、径約23m、高さ約2.7mの円墳と判明。幅3.5mの周堀がめぐる。墳丘は地山整形でなくすべて盛土による。又墳頂下1.4mで、主軸を東西にとる長さ3.9m、幅0.5m、深さ0.5mの箱形土壙を検出。土壙内からガラス小玉20、ガラス丸玉6、碧玉製管玉3が出土。土壙西端部からは微量の赤色料(ベンガラ)が検出された。この他墳頂部平坦面から数個体分の土師器(高杯)が出土した。櫛描き平行直線文と篋描き連続山形文からなる文様構成をもち、本地域での古式土師器には全く見られないものである。文様構成は東海地方、特に尾張を中心とした地域のものと同様点のみとめられる。形態的には、五領式土器に最も類似する。周堀内からも土師器の出土がみられる。小型器台等がほぼ完形で底面近くで出土した。破片ではあるが底部穿孔のみられる底部片、脚部に平行直線文をもつ高杯脚部片(東海地方西部の欠山式に比定できる)等がみられた。

昭和43年、早稲田大学(杉山晋作)調査。送電線工事により墳丘は湮滅。遺物は上総博物館保管。

荻作1号墳 市原市荻作字峯の内(139・175)

村田川の上流にのぞむ標高40mの台地上に所在。他に径20m、高さ2m程度の小円墳が4～5基あり、小古墳群を構成する。墳丘長28m、後円部径18m、同高さ2.5m、前方部幅11m、同高さ1.2m。後円部墳頂下で粘土床施設を検出。直刀1、鉄鏃が出土。6世紀後半と推定される。

昭和42年、早稲田大学(中村恵次)調査。

大厩古墳群 市原市大厩(234)

村田川とその支流神崎川との合流点西岸台地上に所在する。標高約30mで、台地上には弥生時代の集落があり、その上に前方後円墳1、円墳2、方墳6からなる古墳が営まれた。

1号墳

南、西側がすでに削平されており、遺存状態はわるい。径約25mの円墳。幅約1.5mの周堀がめぐる。墳頂部よりやや北西にずれた位置に長さ1.78m、幅0.7mの木棺直葬施設を検出。刀子1が出土。時期判定不能。

2号墳

北側の一部が区域外にかかり未発掘だが、径約18m、高さ2.25mの円墳に間違いのない。墳丘外に幅5mのテラスがあり、その外側に幅2.5～4mの周堀が一周する。周堀の外周径は33～

34mと、墳丘の倍近い。内部施設は墳頂部にはなく、テラス上で2基検出された。一は南西裾にあり、長さ2.9m、幅1mの長方形土壙内に、長さ2.55m、幅0.5mの木棺痕があった。鉄鏃約9が出土。二は東裾にあり、長さ3.3m、幅1mの土壙内に、これより若干小さい木棺を蔵していた。直刀1、耳環2、鉄鏃約5が出土。二基とも木棺の小口、側縁線に粘土を充填していた。6世紀後半。

3号墳

一辺14~15m、高さ1.6mの方墳。幅2~4mの周堀が一周する。各辺とも中央部が幅広い。外周長21~22m、内部施設は未検出。周堀内より遺存度の良い土師器多数と滑石製有孔円板1が出土。土器は五領式に含まれるとされるが、やや新しい様相を示す。5世紀中葉。

4号墳

墳丘長26.1m、後円部径20.9m、同高さ2m、前方部幅9.4mの前方後円墳。幅2~3.4mの周堀が一周。後円部墳頂下と、くびれ部中央で各1基の内部施設を検出。後円部のものは、長さ4.23m、幅2m、深さ0.3~0.4mの土壙内に長さ3.6m、幅0.78mの木棺をおさめたもの。粘土を使用。直刀1、鉄鏃が出土。くびれ部のものは、長さ2.18m、幅0.58m、粘土を使用する木棺直葬施設。直刀1、耳環2、鉄鏃18が出土。

5号墳

一辺15m、高さ1mの方墳。幅2.5~3mの周堀が一周する。4、6号墳と重複し、切り合い関係からこの2基より古いことが判明。墳頂下に、東西に主軸をもつ木棺直葬施設を検出。西側は削平され全長は不明。現存長1.7m、幅0.7m。鉄剣1、ガラス小玉22が出土。周堀内から遺存度の良い土師器（五領式）が若干出土。

6号墳

一辺13.7~15m、高さ約2mの方墳。幅2.5~3mの周堀がめぐる。内部施設は未検出。

7号墳

一辺12.5~13.5mの方墳。高さ1m、幅3~4mの周堀が一周。墳頂下に長さ2.5m、幅0.8~0.9mの、木棺直葬施設を検出。内部からの出土品はなかったが、棺外封土中から管玉が1点出土。周溝内から、かなり多量の土師器片（和泉式）が出土。

8号墳

一辺14~15mの方墳。高さ1m、幅2~3mの周堀が一周。明確な内部施設は未検出ながら、墳頂下封土中で管玉が5点出土しており、この部分に木棺が直葬されていたものと推測される。周堀中よりかなり多量の、遺存度の良い土師器が出土しており、いずれも和泉式の特徴を有する。

9号墳

一辺約16m、高さ1.5mの方墳。幅1.5~3mの周堀がめぐるが、西北の辺中央で途切れ、幅4~5mの陸橋を残す。墳頂下で長さ1.55m、幅0.65mの木棺直葬施設を検出。ガラス小玉4

個が出土。北側の周堀中でかなり多量の、遺存度の良い土師器（五領式）が出土し、中にS字状口縁甕形土器2点が含まれていた。

昭和48年、宅地造成に伴い千葉県都市公社文化財調査事務所（三森俊彦）調査。後湮滅。資料は房総風土記の丘資料館保管。

諏訪台古墳群 市原市村上字諏訪台（273）

1号墳

養老川下流北岸台地上に所在。径14～16m、高さ2～3mの円墳。周堀がめぐり、北東側に幅6～7mのブリッジがある。内部施設は未検出。

6号墳

調査によって南北17.7m、東西21mの東西に多少長い方墳と判明。墳丘はほとんど残らず、わずかに北側平坦面にのみみられた。幅1.5mの周堀が一周。内部施設は2か所（北、南）検出された。南施設は西側を攪乱によって欠き、全形は不明。幅0.8m、深さ0.1mをはかる。直刀1を検出。北施設の規模は確認できなかったが、切子玉1、ガラス製小玉78が出土。6世紀末から7世紀初頭。

7号墳

墳丘の削平が著しく、封土の遺存範囲は径約8m、高さ0.5mにすぎない。幅2.5～3.2mの周堀が一周。外縁径20mの円墳と判明。西側に幅3mのブリッジがあり、ブリッジ上で須恵器（提瓶）と土師器を検出。内部施設は中央、南、西の3か所検出。いずれも主軸をほぼ東西にとる。中央棺がもっとも古く、土壙は長さ4.5m、幅2mの隅丸方形。長さ3.6m、幅0.53m、深さ0.15mの箱形木棺を蔵す。刀子1が出土。南棺は長さ3.9m、幅2.1m、深さ0.8m。西棺は長さ1.6m、短幅0.9m、深さ0.65m。割竹形木棺様の施設と推定された。

33号墳

7号墳のすぐ西側に所在。墳丘長21m、後方部一辺11～12.3m、前方部長6.8m、くびれ部幅3m、前方部先端幅6mの前方後方墳。前方部南面。周堀は、墳丘側壁面の掘り込みが厳密なのに比し、外壁は不整な線を描く。前方部隅角部の一端にブリッジをもつ。内部施設は未検出。周堀底で土師器（小型埴）が出土。4世紀末。

昭和49～50年、上総国分寺台遺跡調査団（田中新史）調査。土地区画整理事業に伴い湮滅。資料は同調査団保管。

東間部多古墳群 市原市西広字東間部多（240）

養老川が形成した沖積平野から多少内陸に入りこんだ北岸台地上に所在する。十数基の古墳で構成される。周辺には持塚、西広、山倉等の古墳群が分布する。

1号墳

径25~27m、高さ2.8mの円墳。調査により実際の盛り土は南北20.6m、東西19.2m、高さ2.5mと判明。まず中心部に小山状の核をつくり、そのまわりに積土する工法をとる。封土の外側にテラスがめぐり、その外側に幅約8mの周堀が一周する。墳頂下で、主軸を東西にとる北、中央、南の3棺を検出。いずれも大き目の土壇内に木棺を直葬し、土壇どうしの切り合いから、中央棺が最も早い構築と判明。中央棺は長さ4.8m、幅1.4~1.75m、深さ0.9m、棺底に赤色料、小口部に粘土を検出。直刀1が出土。北棺は長さ3.9m、幅1.57m、深さ0.4m、小口に粘土をあてる。剣1、鉄鏃5、刀子1が出土。南棺は長さ5.5m、幅1.5m、深さ0.3mで小口に粘土をあてる。棺西端の内側0.5mの位置で、短甲が倒れた状態で出土。他に鉄鏃14、刀子1が出土。墳頂部攪乱墳内より、古墳に伴うと推測される須恵器片が出土。周堀底には土師器（鬼高式の古期）の杯、高杯、碗等が13~14個体あった。

2号墳

調査前の墳丘測量によれば、約20mほどの円墳と推定。西北隅及墳頂部が削平されている。調査によって検出された墳丘は主軸を南北にもつ墳丘長35.5m、後方部背面21.5m、同側縁23.5m、前方部幅11mの前方後方墳と判明。周堀は最大が後方部東側で約5.5mで墳丘相似形を呈すが、前方部東南隅では切れておりブリッジを形成する。西側、南側の周堀を除き、各辺の底面に小さな摺鉢状の掘込みがあり、なおかつその部分から古式土師器の出土が見られる。このことから、5つの作業グループによる築造が推定された。内部施設は検出できなかったが、墳頂部攪乱墳より2個の鉄剣片を検出した。なおこの地を畑にするため墳頂を1.5mほど削平した際、壺や刀が出土したということである。周堀内出土の土師器は五領式土器に含まれるもので、底部を穿孔された供献土器多数が出土した。

3号墳

一辺11.2~12.6mの方墳。幅1~2mの周堀が一周する。封土は削平されており周堀のみ残存。周堀の切り合いから2号墳よりも後に築造されたことがわかる。

3号墳以下はいずれも封土を失い、内部施設が検出されなかったので断定は危険だが、周堀覆土内の混入遺物等から判断して、すべて古墳時代後期の所産と推測される。

4号墳

一辺13~15mの方墳。幅約1.9~2.2mの周堀が一周するものと推定。すでに封土を削平され、内部施設は未検出。周堀内コーナー部より土師器（鬼高期、高杯）が出土。

5号墳

一辺約10mの方墳。幅1.5~1.8の周堀が一周する。内部施設は封土の削平にともない消滅。出土遺物はない。

6号墳

一辺約17mの方墳。四隅が鋭く掘りこまれ整美。幅2.5~3m、深さ約1mの周堀が一周する。内部施設は未検出。

7号墳

一辺約16.3mの方墳。幅約1.5m、深さ1.1~1.2mの周堀が一周する。封土を削平され、内部施設は未検出。

8号墳

7号墳の北側にコーナーの一部を検出。

9号墳

幅1.5~2.8m、深さ1.2mの周堀がめぐる。一辺20mの方墳。わずかに一部封土を検出できたのみ。内部施設は検出できなかった。北側周堀底面直上より、須恵器を2片出土。

10号墳

西北コーナーのみ検出。全形は不明。周堀断面は上面の広がった台形状を呈し、底面はほぼ平らである。報告者は古墳と断定するのに疑念を呈している。

11号墳

周堀の全堀によって前方後方墳と判明。前方部が西面する。調査によって検出された墳丘は主軸を東西にとる。墳丘長24.5m、後方部背後の幅13.2m、後方部長13m、前方部長11.5m、幅推定17mを計る。周堀外周で主軸長28m。幅2m程の墳丘相似式周堀がめぐる。墳丘の南半は台地端の傾斜面にかかっているためか、周堀の掘込み方等施工が多少杜撰である。後方部南側周堀内から須恵器片が出土した。

12号墳

一辺13.5mの方墳。幅1.2~1.5mの周堀が一周するものと推定。各コーナーは鋭い角をもつ。内部施設は未検出。後世の墓墳が一基重複していた。

13号墳

径20mの円墳。トレンチ調査によれば、幅36mほどの周堀がめぐるが、北側にブリッジをもつ。内部施設は未検出。

14号墳

トレンチによって各辺中央部及び四隅を検出。一辺16.9mの方墳。幅2.4mの周堀がめぐる。四隅は鋭角度を強調している。内部施設は未検出。

昭和47年、市原市国分寺台遺跡調査団（須田勉、田中新史）調査。土地区画整理事業により湮滅。資料は同調査会保管。

南向原古墳群（289）

養老川下流北岸台地の奥部、東京湾側から入りこんだ小支谷の最奥に面する。

1号墳

径約21m、高さ約1.5mの円墳。調査により、南北19.1m、東西17.8mとやや南北に長い円墳と判明。幅2.6~5.3mの周堀がめぐる。南東部にブリッジをもつ。外縁径は25.4~26m。盛

土の範囲は東西11.3m、南北12.3m、高さは1.25mと判明。内部施設は2基（北、東）検出。いずれも盛土部分の裾に位置する。北施設は長軸をほぼ東西にとる。長さ2.88m、幅1.24m、深さ0.75m。箱形木棺を使用したものとみられる。木棺の周囲に粘土を使用しおさえる。木棺は、長さ2.1m、幅0.33~0.44m、で、高さは0.3m。鉄鏃9が出土。東施設は南北に主軸をとり、長さ2.41m、幅1.12~1.16m、深さ0.8m。土壙内から粘土の出土がみられるが、木棺使用の積極的根拠はない。内部から鉄鏃9が出土。周堀から須恵器（甕、杯2、蓋1）、土師器（甕1、杯2）出土。6世紀後半。

2号墳

径約21m、高さ約1.5m程度の円墳。盛土の範囲は東西12.3m、南北は推定15m、高さ1.4m。盛土外にテラス状の平坦面をもつ。幅約4.3mの周堀をもつが、石室を中心に両側にブリッジをもつ特異な形態を呈す。墳丘中央部に凝灰質砂岩切石積の横穴式石室をもつ。石室ほりかたの平面形は、奥部が最も広く周堀に近づくにつれて狭くなる。掘込面の規模は長さ9.95m、幅2.37~3.55m、深さ0.95m。石室は単室の両袖式。全長3.32m、奥壁幅1.32m、袖部幅1.05m、中央部幅1.39m、東壁長2.28m、西壁長2.35m、羨道部はやや八字形になり、東壁長0.78m、西壁長0.33m、幅は0.89~0.98m。高さは1.25m残存しており、当初は1.5mほどと推定される。石室埋土中より直刀片、刀子片、鉄鏃片が、羨道及び前庭部から須恵器、土師器、鉄鏃が、又、北側周堀中から鉄鏃、須恵器が出土した。特に羨道入口の周堀中央部には大甕が破砕されて出土し、周堀東側からは、平瓶、壺が、周堀西側からは提瓶1、平瓶2が出土し、墓前祭使用土器と推定された。7世紀前半。なお、本古墳は昭和23年に一度トレンチ発掘をうけている。

3号墳

工事によって墳丘の約四分の三を削平されていた。調査前には径21m、高さ約1.25m以上の規模の円墳と推定、盛土の範囲は東西13.1m、南北11.75m、厚さ0.9m以上と推定。盛土外にテラス状の平坦面をもつが、このテラスは低い盛土を高くみせるためのものと考えられる。幅3.0~5.3mの周堀が一周。周堀外周の径24~25.8m。内部施設は墳頂部中央と南側墳裾に各1、計2基を検出。中央施設は長さ3.35m、中央幅1.6m、深さ0.9mの土壙内に、木棺をおさめたもの。木棺は西小口に粘土塊をおき、長さ3.75m、中央幅1.6m、深さ0.9m。棺の主軸に平行して直刀、鉄鏃が出土。墳裾の施設は長さ2.78m、中央幅0.78m、深さ0.3mの土壙内に木棺をおさめ、両小口に粘土を使用。木棺は長さ2.78m、幅0.78m、深さ0.3m。鉄鏃、刀子が出土。棺外から甕1を検出。周堀中より須恵器（杯身1）、土師器（杯2、碗1）が出土。6世紀中葉。

4号墳

墳丘測量により南北約22m、東西19~20m、高さ約1.5mの円墳と推定。盛土の範囲は東西12m以上、南北15.3m以上、厚さ1.43m。周堀内縁の径南北22.7m、東西20.1m、幅4.2~5.2

mの周堀が一周する。周堀外縁の径30.9m。内部施設は2か所でそれらしきものを検出。墳頂部西寄りの土壇は東西約4.2m、南北約2.4m、深さ0.6m、内部から鉄鏃、刀子が出土したが、内部施設の可能性の少ないことを報告者は指摘している。墳頂部で円筒埴輪、形象埴輪（人物、馬）が出土。周堀内から須恵器（甗1、短頸壺1、壺1）、土師器（甗1、杯5）が出土。6世紀前半。本古墳も昭和23年に、トレンチ発掘をうけている。

5号墳

墳丘はすでに失われていた。周堀内縁径8.6～9.0mの円墳。幅1.2～1.8mの周堀が一周。外縁径は10.9m。東側周堀底で2か所の落ち込みを検出したが、内部施設の可能性はうすい。

6号墳

封土がわずかに遺存。径約10.6mの円墳。幅1.3～1.9mの周堀が一周する。周堀外縁径13.4～14.4m。内部施設は遺存しない。旧表土面から銀輪2が出土し、盛土中の低い位置に内部施設があった可能性も示唆。周堀から須恵器（短頸壺1、杯身1）、土師器（杯1、碗1）が出土。6世紀後半。

7号墳

墳丘はほとんど削平され、径3～4m、厚さ0.2m程が遺存するにすぎない。周堀も後世の溝2本によって切られ遺存は悪い。3号墳、8号墳の周堀をさけて作られ、幅は一定せず、3号墳と接する部分の約5.5mの間は途切れる。周堀の内縁径約10.5m、外径15～16.5mの円墳。封土最下層中より土師器（杯1）が出土。6世紀後半。

8号墳

墳丘は削平されていた。幅1.5～4mの周堀が円形に一周。周堀内縁径11.5～12m、外径15.2～17.2m。内部施設も失われていた。周堀中よりの出土遺物もなし。

昭和48年、上総国分寺台遺跡調査団（田中新史）調査。土地区画整理事業に伴い湮滅。資料は同調査団保管。

西広モチ塚古墳 市原市西広337番地（117・146）

径約35m、高さ約4.5mの円墳。幅5mの周堀がめぐる。内部施設は2基。墳頂下に木棺直葬の1号、その南東1mに2号。2号は長さ3.7m、幅1mの粘土槨。1号からは変形神獸鏡1、ガラス小玉300、琥珀棗玉15、碧玉質石製管玉4、直刀1が出土。2号からは直刀1、砥石1、鉄鏃が出土。琥珀及び砥石はともに銚子産と推定される。周堀内から円筒埴輪が、墳頂部からは須恵器（甗）、土師器片が出土した。

昭和38年、早稲田大学（滝口宏）調査。道路建設に伴い湮滅。

持塚2号墳 市原市西広字持塚（240）

いわゆる国分寺台の台地上に所在する°前方後円墳1、方墳2、円墳5の計8基からなる小

古墳群中に所在。本古墳群は3つの支丘を中心として分布しさらに2分が可能であるという。西側支丘上の方墳は、内部施設から玉類、武器、工具を出土したという。1号墳は大形円墳で埴輪をめぐらす。墳頂部からは陶器古窯址群第一型式の須恵器が、又、内部施設からは良質の変形獣文鏡が出土した。

本墳は1基のみ孤立して所在する。周堀を含めた全長34.3mの前方後円墳。後円部径20.5m、前方部幅21.3mをはかる。幅2～2.2mの周堀がめぐる。後円部周堀がくびれ部の墳丘下に存在し、その部分を埋めて前方部を築造している。報告者は「第一次設計は円墳であり、埋没溝の規模の深さをした円形周溝をめぐらしていたが、石室を築き墳丘の完成に近くなったころ、前方後円墳への設計変更が行なわれ、くびれ部を設定し、その部分の周溝を埋めて、埋没溝の上面に前方部盛土を積み上げたことが推定できる。」と述べている。後円部墳丘はほぼ中央に、南東に開口し、墳丘主軸線にほぼ直交する横穴式石室がある。天井部から盗掘をうけほぼ完全に破壊。玄室は現存している部分で奥壁幅1.78m、壁の長さ2.95m。粘土の存在範囲、土層の堆積状態等から玄室は長さ3.5m内外、幅1.8m、高さ2.1m程度のもので推定される。周堀内、石室内から土師器、須恵器の破片が出土。所謂「真間式」に属するものが含まれる。

昭和47年、市原市国分寺台遺跡調査会（須田勉）調査。後湮滅。遺物は同調査会保管。

持塚4号墳 市原市西広（289）

養老川下流北岸台地上の丘陵突端に1基だけ孤立して所在。すでに土取りにより四周が崩されていた。墳丘は主に地山整形よりなり、周堀はめぐらない。西辺のみ良く遺存し、一辺約22mをはかる。調査後の推定では、一辺26～29m、高さ2.35m程の方墳と復元された。内部施設は3基（北、中央、南）検出された。それぞれ1.2～1.4mの間隔をもつ。北西から南東の方向をとる。北施設は掘込み面で長さ3.68m、幅0.62～0.44m。両小口に粘土ブロックを充填し、通有の箱形木棺と思われる。頭位は南東向き。遺物は遺骸に装着された状態で、勾玉2、管玉16、ガラス小玉7、滑石小玉15が出土。胸の位置には鋒を足元に向けて刀子1が出土。この範囲にはベンガラ（酸化鉄）が散布されていた。頭の東に鈍1と針状のものが、やや離れて鉄斧頭1が出土。北側壁に沿って剣1が鋒を足元に向けて出土。中央施設は全長4.81mで、2基の木棺痕が接続したもの。西側棺は、長さ2.52m、東側棺は長さ2.26m。東側棺は0.1mほど、西側棺より底面が高い。遺物は出土しなかった。南施設は中央施設と同様、東、西2棺が重複。西側棺に付設されたような状況。全長4.47m、西側棺の長さ2.10m、東側棺は長さ2.47m。遺物は出土しなかった。5世紀前半から中葉頃の築造と推定され、国分寺台の台地上では東間部多2号墳に続いて築造されたものと考えられる。

昭和48年、上総国分寺台遺跡調査団（田中新史）調査。後湮滅。資料は同調査団保管。

山倉1号墳 市原市山倉（285）

養老川河口付近の東岸台地上に所在。東西にのびる細尾根上に、前方後円墳2、円墳3が、相接して1列にならぶ。やや離れて北方に方墳1がある。前方部は西南面の前方後円墳。全長45m。2段築成で、下段は地山を整形して形成。中段テラス上に埴輪列がめぐる。後円部背後と前方部前面にのみ幅1.5m程の周堀がめぐる。後円部南に開口する横穴式石室をもつが、盗掘により石材まで抜かれ、鉄製品残欠を出土したのみ。円筒埴輪、朝顔埴輪の他形象埴輪(人物、太刀)を検出。また石室の裏込め部から完形須恵器数点を検出。6世紀後半。

昭和50年、上総国分寺台遺跡調査団(米田耕之助)調査。後湮滅。資料は調査団保管。

海保古墳群 市原市海保字古谷前(148)

養老川に南側から入り込む小支流によって形成された小支丘上に所在。8基の円墳によって構成された古墳群で、最北端から1、2、3号墳と呼称。

1号墳

本墳は調査前は径10m程の南北に長い楕円形をした円墳と推定。南側のみ周堀を確認。墳頂より北側の部分で粘土の散布を認め直刀破片を検出。また墳頂部攪乱域内で鉄剣破片を検出。

2号墳

南北18.5m、東西15.5m、高さ1.5m程の円墳。裾部は地山整形によって形成。盛土の範囲は南北11m、東西10.3m、高さは最大0.9mをはかる。周堀が半周する。内部施設は未検出。墳丘下中央、旧地表上に破砕した土器を検出。完形に復元できた。五領式であり古墳築造に伴って廃棄された可能性が強い。

3号墳

径29.3m、高さ3.8mの円墳。裾部は地山整形により形成。地山を削って段をつくり段の下端で径24mをはかる。墳頂下で頭位を南東にとる木棺直葬施設を検出。長さ4.24m、幅0.75m、深さ0.15m。壙底は舟底状を呈す。両端に粘土塊を置く。ガラス小玉32、碧玉製管玉14、瑪瑙製勾玉2、剣3、鉄鏃5が出土した。

以上、昭和43年、早稲田大学(中村恵次)調査。宅地造成に伴い湮滅。資料は早稲田大学考古学研究室保管。

二子塚古墳 市原市姉崎(27・45・295)

養老川河口の沖積平野中に所在。前方部は西南面の前方後円墳。墳丘長93m、後円部径45m、同高さ9.8m、前方部幅46.5m、同高さ9m。周堀は未確認。内部施設は攪乱を受けていたが、遺物の出土状況から前方部、後円部の二か所に存在したと思われる。前方部の施設は地元民による松根の採掘により破壊されたが、石枕1、直刀2、瑪瑙勾玉1を出土した。後円部の施設は度々の発掘により遺物の出土状況は混乱し不明であるが、蟠地文鏡1、仿製変形文鏡2面、硬玉製勾玉7、滑石製大型勾玉1、滑石製管玉4、瓌玉4、ガラス小玉300余、銀製垂

耳飾、石製模造品（刀子5、有孔円板2、白玉3）、立花4、直刀片、鉄鉾、金銅片が出土した。この外に、後円部墳頂下約1mの地点から発見されたという四神十二支鏡が報告されている。

昭和22年、国学院大学（大場磐雄、亀井正道）調査。昭和43年、県指定史跡。遺物は国学院大学考古学資料室保管。

山王山古墳 市原市姉崎（107・111・117）

姉崎古墳群中、西南端に位置する。墳丘長75～80m、後円部径34m、同高さ8m、前方幅48～54m、同高さ9.9m、自然地形を整形して造られた前方後円墳。後円部墳頂下に、墳丘主軸に沿って粘土槨を検出。長さ9m、幅3.5mの長方形で、木棺痕は長さ7m、幅1.5、深さ0.3m、棺床の幅0.95mをはかる。木棺東端部から銅製冠と一対の青銅製耳環、冠の下に朱、雲母片が散布。北側槨壁には環頭太刀1、刀子、銀製鞘、小形の槨、鼈鏡1、南壁際に木鞘の直刀2、北壁寄りに漆の皮膜を伴う二条の帯状の木質、鉄鏃、胡録が出土。後円部西南部より埴輪出土。

昭和38年、大場磐雄、甘粕健調査。湮滅。

天神山古墳 市原市姉崎（27・339）

姉崎古墳群が所在する台地の、北東端に位置する。「台大塚」「大塚」とも呼ばれる。墳丘長約120m、後円部径約70m、後円部と前方部の比高差約5mの前方後円墳。前方部は西面する。周堀は部分的にめぐるといふ。墳形、立地から、姉崎古墳中で最も古い古墳と考えられ、5世紀前半代と推定される。

昭和49年、明治大学実測調査。昭和48年県指定史跡。

六孫王原古墳 市原市姉崎（221・268）

従来、存在は確認されていたが、無名古墳とされていた。姉崎古墳群の南端に位置する。調査前は墳丘長約37mの前方後円墳ととらえられたが、調査の結果、長方形の周堀にかこまれた前方後方墳と判明。墳丘長45.4m、後方部一辺26.5～27m、前方部幅25mで、周堀外周は長さ51.5～52.5m、幅32～32.5mをはかる。内部施設は、後方部側面に開口する横穴式石室だが、盗掘によって、徹底的に破壊され、本来の形状はまったく不明。石室の掘り方全長は現存部分上縁7.4m以上、下底5.2m以上。出土遺物はすべて原位置でなく金銅製鏡板、金銅製留金具、鋌頭、直刀、刀子、鉄鏃6、不明鉄製品が出土。後方部墳頂より破砕された須恵器大形甕、前方部北側周堀内より砥石が出土。6世紀後半から7世紀初頭と推定される。長方形の周堀形態が明らかとなったこと、墳丘の構築が厳密な築造企画によっていること、使用尺度が推定できそうなことなど、注目される所見を提示した古墳である。

昭和45年、中村恵次調査。現存。遺物は早稲田大学考古学研究室保管。

原一号墳 市原市姉崎 (163)

姉崎古墳群の中央部、台地の奥部に所在する。前方部を北面する前方後円墳。墳丘長約70m、後円部径約36m、同高さ5.7m、前方部幅約32m、同高さ6mをはかる。後円部トレンチで、幅8mの周堀が検出されたが、全形は不明。後円部墳頂下で、長さ2.2m、幅1.6mの棺床に粘土を敷いた遺構が検出され、木棺直葬と推定される。内部より直刀1、鉄製刀子3、鉄鏃4を検出。6世紀前半から中葉と報告されているが、後半代にする考え方もある。

昭和48年、石井則孝調査。後湮滅。

徳部台古墳 市原市姉崎 (168)

姉崎古墳群の東端に位置する。方墳で、南裾部に凝灰砂岩積みの中袖式横穴式石室が内蔵されていたという。出土遺物については公表されていない。

昭和44年、立正大学(丸子亘)調査。

木戸窪古墳 市原市姉崎 (168)

姉崎古墳群の東端に位置し、徳部台古墳の南に隣接する円墳。墳丘下に粘土槨2基が検出されたという。直刀片、刀子片、銅環、小玉、卜骨片が出土したというが詳細は不明。

昭和44年、立正大学(丸子亘)調査。

富士見塚古墳 市原市姉崎 (146)

姉崎古墳群に属するが、大形前方後円墳が散在する台地から派生する支丘上にあり、周囲には小円墳ばかりが所在する。径約25m、高さ約3.5mの円墳。墳頂下約0.6mで、木棺直葬施設を検出。主軸を東西にとる。棺床南縁から鋒を西に向けて直刀1、棺床の両端から鉄鏃20本を束状に収納した状態で鉄地金銅装胡籙が出土。北縁からは、鏡面を上にして、白銅製小形仿製鏡1が出土、その下から鹿角装刀子1が出土した。

昭和38年、早稲田大学(中村恵次)調査。工場建設により湮滅。

福増1号墳 市原市海士有木 (139・175)

養老川の北岸台地上に所在。周囲に数基の古墳が群集。耕作によりすでに墳丘をまったく失っていた。周堀も未調査で墳形不明。内部施設は、全長5.92m、幅約1m、後室幅約1.6mの複室構造の凝灰砂岩切石積横穴式石室。天井石は崩落。鉄鏃数片が後室内より出土。時期判定の資料に欠ける。

昭和42年、早稲田大学(中村恵次)調査。

福増2号墳

径20m、高さ0.7m。耕作による削平が著しい。周堀は不明。地山下に全長3.7m、玄室幅1.2m、羨道幅0.7m、南側に開口する黄色砂岩の切石積両袖式の横穴式石室が営まれ、内部より刀子3、切子玉1、琥珀製棗玉5、金銅製耳環2が出土。また前庭部から、須恵器多数が出土。7世紀前半と推定される。

福増1号墳に同じ。

牛久1号墳 市原市牛久(150・159・169・187)

養老川の中流域に合流する内田川に沿って発達した河岸段丘の丘陵端に位置する。もと10数基の古墳が存在したが、調査時には3基を数えるのみ。1・2号墳は東西に並び、1号墳の南に近接して2号墳が位置する。

1・2号墳は高さ1～2m程の小円墳であり、詳細な報告はなされていないが、墳頂部から五領式の壺形土器及び銅鏃1本の出土が報告されており、養老川流域では最も時期の古く溯る古墳のひとつとして注目される。

昭和43年、石井昭調査、県立市原高校の校庭拡張に伴い消滅。

牛久3号墳

西側は破壊されている。東西約28.5m、南北約32mの方墳。その外側に約2～3mの平坦面をもち、さらに幅2mほどの周堀がめぐる。埋葬施設は、ほぼ南面する横穴式石室。堀方長約7m、幅3.6m。現存石室長4.2m。前室長1.5m、幅0.75m。後室長1.6m、幅0.85m、鉄鏃は前室閉塞石付近から出土。釘が後室床面から出土。墳丘北側段築付近で土師器、高杯、墳頂から須恵器台付長頸壺出土。7世紀中葉のものと推定される。

昭和48年、東京教育大学(増田精一、岩崎卓也)調査。学校々庭拡張に伴い湮滅。

瓢箪塚古墳 市原市南総町江子田小字送り(111・115・117)

養老川により形成された沖積平野に突出した標高約65mの台地上に所在。付近には前方後円墳3基、円墳42基が存在し、すでに11基ほどが消滅したといわれる。墳丘長47m、後円部径26m、同高さ4.5m、前方端部幅25m、同高さ4.5m、前方部を西北西に向ける。幅4.3～10.7mの変形周堀がめぐる。後円部墳頂下に、長さ約3.5m、幅約0.7mの粘土を目張り等に使用した木棺直葬施設を検出。東半部の中央やや北寄り直刀1、刀子1、この南側中央部に純金製耳環2、勾玉16、切子玉18が出土。西半部中央に轡一式、鉄地金銅張鏡板2、鉄地金銅張鉸具20、鉄地金銅張雲珠3、鉄地金銅張杏葉5、鉄鏃20、ガラス玉248が出土。これらの上面に麻布と思われる布片が炭化付着して出土。

昭和38年、武田宗久、中村恵次調査。牧草地造成に伴い湮滅。遺物は県立千葉高校保管。

女坂1号墳 市原市江古田女坂(158)

内田川、田尾川にかこまれた丘陵上に所在。一辺約30~32mの方墳。高さ約3.5mで二段築成。幅約4mの周堀が一周する。墳頂下で2基の組合式木棺痕を検出。一は長さ2.96m、幅0.55m、内部より釘が出土。他は長さ1.17m、幅0.58m、内部より釘が出土。ともに副葬品なし。周堀内より須恵器(長頸壺、大形甕)、土師器(高杯、杯)が並べられた状態で出土。

昭和43年、武田宗久調査。宅地造成に伴い湮滅。

向原古墳群 市原市郡本(96・100)

東京湾岸平野に突出した台地の縁辺部に所在する。円墳14基程度からなる。

1号墳

墳丘はすでに削平。残存裾部の弧形から径33m程の円墳と推定。7×4mの範囲で粘土の散布する部分があり、軟砂岩切石一個を検出、またかつて同様の大石7個を抜きとったと伝わり、横穴式石室を蔵していたことがわかる。墳丘下に鬼高期住居址が一軒あった。

2号墳

径26m、高さ3.5mの円墳状を呈す。「サンヤ塚」の里称があり、封土が黒色土のみよりなる点から、近世の塚の可能性が大きい。

3号墳

径18m、高さ0.9mの円墳。攪乱が著しいが、墳頂下約1mで刀子1、鉄鏃6を検出。粘土等をまったく認めず、木棺直葬施設と推定。

4号墳

径18m、高さ0.9mの円墳。耕作により削平をうける。南西に開口する横穴式石室を蔵す。長さ2.6m、幅0.8~1.07mで、奥壁から1.9m程の部位に柱石を両側壁際に立て、仕切りとする。すでに盗掘をうける。鉄鏃、刀子の残欠、金銅製耳環2、琥珀製棗玉片、須恵器片(甕、杯、提瓶)若干が出土。

昭和36年、国学院大学(寺村光晴)調査。採土工事に伴い湮滅。

菊間天神山古墳 市原市菊間深道永台(339)

直径約39m、高さ約3.5mの円墳。円筒埴輪片をもつ。未調査。

東間部多16号墳 市原市西広(240・289)

蛇谷遺跡内に所在。墳丘はすでに完全に削平。東西に主軸をとる。全長26.5mの前方後方墳。後方部コーナーにブリッジを有す。東間部多2号墳に類似する形態。詳細は未報告。

吉野古墳群 市原市西国吉(343)

前方後円墳3基を含む約15基で構成された古墳群。1号墳は3基のうちで、最大のもので、墳丘長約44m、前方部幅約26m、後円部高さ約4.5m。[円筒埴輪出土。市原市指定文化財として保存。2号墳は墳丘長約32m、前方部幅約11m、高さ約1.5m、後円部径約18m、高さ約3.2mの前方後円墳。3号墳は道路工事により前方部を削平され、後円部のみ遺存。

姫宮古墳 市原市菊間 (343)

墳丘長約51m、前方部高さ約3.6m、後円部径約18m、後円部高さ約3.9mの前方後円墳。未調査。市原市指定史跡として保存。

蛇谷遺跡周溝址 市原市西広字蛇谷 (289)

一辺約15mの方形。コーナーに1か所ブリッジを有す。東側周溝内から100個体近くの土器が出土。国分寺台遺跡調査団発掘。詳細は未発表。

南総中遺跡周溝址 市原市牛久江古田 (185・192・239)

養老川と内田川によって形成された鶴舞江古田丘陵を構成する1支丘上に所在。

H-17号址

19×17.5mのほぼ正方形を呈す。溝は幅1.7m、深さ0.6~0.8m。台状部は15.5×14m。周溝内より古式土師器が出土。

I-17号址

北溝長8.5m、幅1.5mで四隅の切れる形態のものと推定される。

J-18号址

北溝長7m、幅1m、西溝長3.8m、幅0.8m。南溝長4.2m、幅0.8mの3本の溝を検出。隅の切れる形態と推定。

H-20号址

北、西溝長5m、幅1.2m、深さ0.3m。四隅の切れる形態と推定。

K-21号址

北東溝長8.3m、南東溝8.4m。幅1.2~1.8m、深さ0.6m。台状部は東西10m、南北11.5m。中央部に長径2m、短径1mの土壇を検出。北東溝から宮ノ台期の長頸壺が出土。

M-24号址

北西溝8.5m、北東10m、幅1.4m、深さ0.5~0.9m。四隅の切れる形態。台状部は東西12m、南北13m。北東溝から合口甕棺(宮ノ台期)を検出した。

K-27号址

北西溝2m、北東溝3m、幅0.4m、深さ0.3m。四隅の切れる形態。台状部は南北5m、東西4m。

O-24号址

長さ4m、幅1mの溝1本を検出。

K-26号址

長さ3m、幅0.4mの溝2本を検出。

G-22号址

北西溝9m、南西溝9.5m、幅1.5m、深さ0.5m。台状部は、南北12.5m、東西12m。四隅の切れる形態。中央部に長径33m、短径1.6m、深さ0.5mの土壙を検出。

J-28号址

南東溝6.7m、南西溝7m、幅0.8~1m、深さ0.6m。台状部は南北9m、東西10m。四隅の切れる形態。中央部で長径1.8m、短径0.8m、深さ0.2mの土壙(A)。南東部に長径1.1m、短径0.7m、深さ0.5mの土壙(B)を検出。土壙Bからは人骨を検出した。

L-30号址

南東溝8m、幅0.8m、深さ0.7mの溝を検出。J-28号と同様な形態を示すと推定される。昭和46年、南総中学校建設にともない駒沢大学(倉田芳郎)調査。

加茂遺跡C地点周溝址 市原市加茂字中島(287)

溝の長さ南と北21m、東21m、西16m。幅は3m前後、深さ0.4~0.5mをはかる。西北、西南隅の切れる形態。台状部19×19m。中央部から9個の土壙を検出。周溝内より弥生町期の土器が出土。昭和50年、上総国分寺台遺跡調査団発掘。

台遺跡周溝址 市原市加茂字台(287)

方形周溝2基を検出。5号址は、一辺8.5~19m、幅1.2~1.9m、深さ0.5~0.8mの方形。四隅の切れる形態。台状部は11.7×10m。溝から宮ノ台期の土器片出土。11号址は一辺6~8m、幅0.7~1.2mの溝3本検出。四隅の切れる形態。台状部は9×8m。

昭和50年、上総国分寺台遺跡調査団発掘。

向原遺跡周溝址 市原市向原(96・100)

方形周溝遺構2基を検出。1号址は4号墳墳丘下に約3分の2が重複する。南北溝長約9.9m(周溝内側長約7.4m)、西側溝を欠くが四隅の切れる形と推定される。ほぼ中央部で東西2.0m、南北1.14m、深さ0.45mの土壙を検出。遺物の出土はなかった。2号址は4号墳によって破壊、かろうじて北溝、東南溝の一部を残す。東西長約8.15m(周溝内側6.25)。四隅の切れる形と推定される。北側溝長5.5m、幅1.25m、深さ0.56m。

昭和48年、南向原古墳群と同一機会に調査。

菊間遺跡周溝址 市原市菊間 (235・254)

新皇塚古墳と同一台地上に所在。同古墳と同時に調査。

1号址

北、西側は調査区外。東、南溝と西溝の一部を調査。現存東溝長21m、幅3.7m、深さ1.1m。南溝20m、幅3.2m、深さ0.9~1m。内部施設なし。周溝内から弥生式土器の出土がみられた。

2号址

南西溝は調査区外。長さは北東溝13.4m、南東10m、南西8m、北西8.4mとまちまちで、幅は2.2~3m、深さ0.6~0.95m。四隅の切れる形態。各溝とも、貝層、土器を出土した。貝はほとんど、ハマグリ、キシャゴ。土器は宮ノ台式が多い。

3号址

東西南北24m、南北外周25mの円形。幅2.5~4.5mの周溝がめぐる。深さ0.5~0.6m、東西周溝内に土壙が検出された。東側土壙は長さ2.25m、幅0.85m、深さ0.35m。内部より鉄鏃、刀子が出土。西側土壙は、長さ1.85m、幅1m。土壙の上位周溝部分に須恵器広口壺が正立して出土。

4号址

約5分の1が未調査。外周で南北18m、東西約18m。ほぼ正方形。幅約2.2mの周溝がめぐる。深さ0.4m。周溝内から宮ノ台式土器片の出土がみられた。

5号址

外周径21mの円形。幅2.4~3mの周溝がめぐる。深さ0.35~0.4m。北側周溝の底部に置かれた状態で須恵器広口壺が出土。他に周溝内から円筒埴輪片、弥生式土器等の出土がみられた。

神門4号墳 惣社字神門 (309)

養老川河口周辺の沖積平野を見下す台地上に所在。調査前に墳丘南側が削平されていた。推定墳丘長48~49mの前方後円墳。周堀は下底幅5.5~8.2mをはかり前方部前面でとぎれる。後円部周堀内側下底間30~31m。周堀を含めた全長は55mになる。墳丘の高さは後円部で約3.35mをはかる。墳丘下、旧地表面で、墳丘築造に際し、草木を焼き払った痕跡がみられる。また地山面に古墳築造に関連した特殊遺構、「A」「B」を検出。A、B遺構ともプランは通有の住居址と形態は同様であるが、A遺構には炉がなく、また、一隅に隅丸方形の柱穴が検出されている。B遺構からは、19個体の土師器（壺4、甕5、台付甕5、甗1、鉢2、器台1、高杯1）が出土。両遺構とも墳丘構築と同様の手法をもって埋設される。旧表土面からは100個体以上の土師器が出土した。器種は甕、台付甕、叩き手法の甕、高杯、装飾壺、手焙形土器がある。出土状況よりみて土器使用から盛土開始までに若干の時間があつたと推定される。埋葬施

設は墳丘下0.5mで検出された。ほぼ南北に主軸をとる墓壇内木棺直葬墓である。墓壇は全長4.32m、下底4.05m、幅1.33~1.36m、深さは検出面から1.2mをはかり、棺底はU字形を呈す。遺物の出土地点は棺底、棺上の埋め戻し中間段階、墓壇埋め戻し完了の面の3段階に分けられる。棺底から（ベンガラ部分を頭部と推定）胸部部分に管玉31、ガラス玉、右手位置に剣1、下肢上半両側、足元に鉄鏃41、棺外墳底部分に鎗1が出土。棺上の埋め戻し中間段階から、鈍1、硬玉勾玉3、管玉約42、ガラス玉数十、が出土。玉類はすべて縦割りされており一連の首飾りと推定される。墓壇埋め戻し完了面から土師器（壺5、高杯5、器台7）が出土。遺物は棺の腐朽によって墓壇内上部から出土。これら土器群は在地的性格を有さないもので纏2向式とされた土器群に最も類似する。装飾小型壺は庄内式的特徴を有するものであり所謂前野町式土器との関連が問題とされる。また本古墳の墳形は、東間部多2号墳等に類例がみられる形態で、前方部で周堀が全周せずブリッジを有することである。最丘の調査例が増加し、古式古墳の特徴の1つと考えられてきている。

昭和50年、田中新史他調査。

郡本A号墳 市原市郡本字向原向（40・115）

市原古墳群の一支群である。直径約22m、高さ約3mの円墳、封土内から鉄鏃片と思われる鉄片を検出したのみである。

郡本B号墳

直径約10m、高さ約2mの円墳。ボーリング探査では埋葬施設らしきものは検出されなかった。

郡本C号墳

直径約20m、高さ約17mの円墳。古くから「石のカロト」と呼ばれていた。墳頂よりやや西南に凝灰砂岩使用の横穴式石室があり昭和10年代に盗掘されたとのことである。石室は西南方向に開口する。奥行2.2m、幅1.1m、高さ1.5mで載石切組積である。人骨片、歯牙72、小玉5、銅剣2、金環9、鉄刀片、刀子3、鏝4、鉄鏃25、土師器片が出土。玄室床面に貝殻が一部散布されていた。前庭から須恵器片、土師器、甕形土器、鏝が出土した。

郡本D号墳

直径約10m、高さ2mの円墳。埋葬施設及びそれに伴う遺物は検出されなかった。

神門A号墳 市原市惣社字神門（40・115）

直径約22m、高さ約4mの円墳、埋葬施設は検出されなかったが、墳丘基底面に若干の粘土層が検出され、その上面から鉄鏃2、鉄剣1、ガラス玉1が出土した。他は不明である。

神門B号墳 市原市惣社字神門

直径約10m、高さ約3mの円墳、埋葬施設及びそれに伴う遺物は検出されなかった。

カロト塚古墳 市原市姉崎 (115)

姉ヶ崎古墳群C支群に属す、明治年間に開墾により墳丘は湮滅。当時石材が出土したといわれる。「カロト」という方言から横穴式石室が構築されていたと推定される。

天神台遺跡方形周溝址 市原市惣社 (272)

養老川によって形成された河岸段丘上。標高25m。都市総合開発計画による道路建設のため湮滅。付近に条里灌漑用の「雷電池」がある。

1号周溝址

8.15×7.20mの方形で、周溝は全周。封土、埋葬施設は不明。

2号周溝址

6.80×6.70mのはほぼ正方形で、周溝は全周、封土、埋葬施設は不明。

3号周溝址

6.67×6.77mのはほぼ正方形で、周溝は全周、封土、埋葬施設は不明。

4号周溝址

5.43×5.35mのはほぼ方形で、周溝は全周、封土、埋葬施設は不明。

5号周溝址

10.7×5.35mのやや横長の方形で、周溝は全周。中央部に3×1.5m、深さ0.3mの落込みがあり、埋葬施設と思われる。遺物等については不明。

6号周溝址

7.95m×7.95mの正方形、周溝は全周。封土。埋葬施設は不明。

7号周溝址

7.00×6.65mのはほぼ方形、周溝は全周。封土。埋葬施設は不明。

8号周溝址

11.0×9.75mのはほぼ方形。周溝は全周。封土、埋葬施設は不明。周溝内より古式土師器が出土とのこと。

9号周溝址

16.6×17.2mの方形。周溝は全周。封土、埋葬施設は不明。

10号周溝址

15.1×14.9mの方形。周溝は全周。封土、埋葬施設は不明。

11号周溝址

12.3×14.3mの方形、周溝は全周。封土、埋葬施設は不明。

12号周溝址

16.5×17.5mの方形、周溝は全周、封土、埋葬施設は不明。

13号周溝址

13.0×14.2の方形、周溝は全周。封土、埋葬施設は不明。

昭和49年、天神台遺跡発掘調査団（滝口宏、平野元三郎）調査。

台遺跡B地点2号墳 市原市加茂字台（287）

養老川が東京湾に流入する河口東岸上。標高約19m、水田との比高12m、一辺9.7m～9.9mの方形、幅1.1～1.3mの周溝が一周する。埋葬施設及びそれに伴う遺物はない。北側溝底から須恵器長頸壺の頸部より上のみ出土。

昭和50年、上総国分寺台遺跡調査団（滝口宏、米田耕之助、半田堅三）調査。

堀の内中谷遺跡 市原市大字土字堀の内中谷（332）

養老川により開析された支谷が入り込んだ良好な舌状台地上。古墳時代の円形周溝墓を調査。

昭和52年、ゴルフ場造成にともない日本文化財研究所（柿沼修平）調査。

稻荷台遺跡 市原市山田橋字稻荷台（332）

養老川により開析された沖積平野を見下す台地上、標高約20m。円墳の痕跡2ヶ所を調査。

昭和52年、土地区画整理事業にともない市原市教育委員会（滝口宏）調査。

大厩遺跡周溝址 市原市大厩（234）

E-3号址

一辺約7.2mの方形。溝幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.4m。台状部中央に2×1.4mの方形の土壇を検出したが、内部施設とは考えられないという。周溝内から弥生式土器片が出土。

E-4、5b号址

5b号址は溝長11m、幅1.1mの溝状遺構。4号址は5b号址との間にブリッジを有する形で直交する。四隅の切れる方形周溝遺構に類似する。周溝内から弥生式土器片が出土。

E-12号址

東西11.4m、南北11.8mの方形。溝幅は0.9～1.4m、深さ約0.4m。内部施設なし。周溝内から弥生式土器が出土。

E18号址

南側を削平される。内径約10.9m、外径約13.7mの円形。4号墳の墳丘下から検出された。周溝内から弥生式土器片が出土。

昭和48年、大厩古墳と同一機会に調査された。

武士遺跡周溝址 市原市福増字向台 (290)

養老川によって形成された段丘上に所在、標高約70～80m。方形にめぐると推定される。東溝及び北、南溝の一部が残る。深さ約0.25～0.4m。南溝幅は広く約2m。溝内から弥生時代後期の土器片が出土。

昭和50年、市原東給水場建設にともない市原市教育委員会（須田勉）調査。

江古田北古墳群（南総中学校内）（185・192）

市立南総中学校々舎建設用地内。養老川とその支流内田川にかこまれた鶴舞江古田丘陵の一
支丘上。標高46～50m。水田との比高差20m。前方後円墳1、円墳10による古墳群（江古田北
古墳群）を構成。

昭和46年、倉田芳郎他調査。詳細は未発表。

東関山古墳 市原市菊間字北東関前 (25)

主軸長約50m。前方部高さ約5.5m（17尺）、後円部高さ約6m（18尺）。

柴田常恵調査。大正13年「史蹟名勝天然記念物保存法」により仮指定。

塚の台2号墳

養老川に沿って伸びる標高60～70mの丘陵上に位置。1号墳は調査によって後世の塚と判明。
本墳は、南北31.5m、東西25.8mの楕円形を呈し、後世の攪乱をうけていた。周堀は不明。
埋葬施設は軟砂岩による横穴式石室と思われる。内部から鉄釘7が出土。

昭和27年、樋口清之他調査。

福増中学校裏古墳（139・175）

埋葬施設は粘土槨で、内部から小形仿製鏡、刀子が検出された。

昭和41年、下津谷達男調査。

〔17. 千葉市〕

舟塚古墳 千葉市土気町舟塚 (141)

印旛沼に注ぐ鹿島川の水源付近の台地上に所在する。上総、下総の国界にあたる（土気は近年山武郡から編入）。南西面の前方後円墳。墳丘長37m、後円部径19m、高さ3.6m、前方部幅25m、高さ3.9m。墳丘相似形の二重周堀を伴う。内側周堀の方が幅広く3.5～4m、外側は3m前後。後円部墳頂下に奥壁をおく、ほぼ南東へ開口する横穴式石室を伴う。複室構造をとり、両室とも両袖式。砂岩切石により築かれる。全長6m、後室長2.1m、幅1.2～1.3m、高さ1.75m。前室長2.25m、幅1.1m、羨道は現存長1.15m、幅0.85～1m。前、後室とも床面に切石を

敷く。石室内は盗掘され、出土遺物は皆無。後円部墳丘内、石室付近、天井石と略同レベルの位置で須恵器（フラスコ型長頸瓶2、高杯1、蓋付短頸壺1）、土師器（手づくねの埴型）が出土。

昭和28年、早稲田大学（中村恵次）調査。県立農村青年研修所改築工事に伴い湮滅。

椎名崎古墳群 千葉市椎名崎（206・209・262）

村田川下流北岸の台地上にあり、北へ侵入した小支谷の最奥部に面する。前方後円墳1、円墳4、墳形不明3の8基からなる。

1号墳

前方部ほぼ西面の前方後円墳。南側裾部は農道により削平。墳丘長44.6m、周堀を含めた全長53.8m。後円部径約30m、前方部幅26~28m。幅約5mの墳丘相似式の周堀が一周すると推定される。墳丘の基本的な構築方法は、まず古墳の輪郭線に沿って盛り土をし、次に土堤内を埋めて墳丘を築く。後円部の構築が先行するらしい。南側くびれ部に、ほぼ南向きに開口する単室の横穴式石室をもつ。石室はり方は羽子板状に一方がすぼまる長方形を呈す。石室主軸長2.4m、奥壁幅1.47、袖石部幅1.27m、側壁長2.40~2.45m。石材は軟質砂岩を用い、基部のみ大石を縦に置き、2段目からは小さ目の切石を小口積みする。玄室内より直刀1、刀子1、鉄鏃40以上、用途不明鉄器1、金銅製耳環2、鉛製？耳環2、鉛製？釧4、ガラス小玉238、須恵器（短頸壺1）が出土。

2号墳

二重周堀をもつ円墳。耕作で削平され、封土の遺存はわずか。封土はかなり削平されていた。内側の周堀は内縁径約24m、幅2~3mでめぐる。ブリッジが2か所ある。外側の周堀は内縁径直径約34mで、幅2~3m。中間の堤は幅2.5~3.5m。墳丘構築方法は1号墳と同様。西側周堀に開口する横穴式石室と南東裾部の箱式石棺。横穴式石室掘り方は開口部がやや狭い長方形を呈す。掘り方底と周堀底のレベルはほぼ等しい。玄室は長さ2.11m、奥壁幅1.2m、袖石下の幅1.15m。幾分胴張り気味のプランをもつ。羨道は長さ1.48m、幅0.6~0.65m。石室全長は3.53m。玄室床面には、石を敷く。箱式石棺は主軸をN-75°-Eにとり、墳丘中央から約8m離れる。石棺内法は主軸長1.94m、幅0.33~0.42m。横穴式石室から直刀3、刀子2、鉄鏃20、耳環2、勾玉12、管玉4、瓊玉9、【石製白玉4、ガラス製白玉31、ガラス小玉264】が出土。すべて玄室からの出土で、出土状況から追葬の可能性が推定される。箱式石棺からは鉛製（？）耳環2が出土。内側周堀から、須恵器（長頸壺、杯身）、土師器（杯）が出土。

3号墳

耕作により削平され、周田との比高1m程の小丘と化していた。周堀内縁径25~26m、幅1~4mの周堀がめぐる。2号墳に接する北東部の周堀は極度に幅せまくなり、2号墳をよけてるので、築造の順序がわかる。周堀外縁径は約33m。西側周堀に開口する横穴式石室を検

出。石室中軸線の延長は墳丘中心点にほぼ一致し、奥壁から墳丘中心下で約8mを計る。玄室は長さ2.18m、奥壁下の幅1m、袖石下の幅1.04m。羨道の長さ1.15~1.24m、幅0.86m。遺物はすべて玄室から出土。直刀5、鐙3、刀子4、用途不明鉄器6、耳環2、切子玉8、勾玉2、管玉2、白玉15、ガラス玉131がある。追葬によるためか、奥壁よりの両わきに偏在していた。周堀内から須恵器（長頸壺片、甕片）が出土。

4号墳

西南裾約3分の1を道路工事により削平されていた。幅1.5~2mの周堀がめぐり、内縁径は約22mをはかる。南側に開口する横穴式石室をもつ。玄室は長さ2.13m、奥壁下の幅2.22m、羨道は、左側壁長0.98m、右側壁長1.30mと歪みがある。幅は0.84m。遺物は玄室、羨道の両方から出土し、盗掘を受けた形跡がみられた。玄室からは直刀1、鉄鏃15、ガラス小玉8、須恵器（フラスコ型長頸壺2）が出土し、羨道からは刀子1、鉄鏃が出土した。他に本来玄室にあったと考えられる遺物として、鉄鏃3、耳環1、須恵器（平瓶1）が石室外で検出された。

5号墳

墳丘は完全に削平されており、発掘によって始めて存在が知られた。幅1.3~2.6mの周堀が一周する円墳で、内縁径21~23m、外縁径26~27mをはかる。墳丘南裾に、地山を掘り込んで箱式石棺を築造、長軸をほぼ正しく東西にとる。内法で長さ1.95m、幅0.4~0.5mをはかる。刀子2、鉄鏃11、用途不明鉄器3、棗玉8が出土。玉類は棺の東側から出土し、東枕と推定される。

6号墳

周堀をもたない特殊な古墳。平坦な畑地に、地山を掘りこんだ墳内に築いた横穴式石室のみ検出された。ほぼ南西に開口し、前庭部につづけて2.6×4.9mの長円形の掘りこみを設け、石室への出入りの施設とする。石室は単室で、羨道を付設しない。鉄鏃20、用途不明鉄器6、鉛製(?)釧1、ガラス小玉365が出土した。

以上、昭和49年、日本住宅公団土地区画整理事業（千葉東南部地区）に伴い、千葉県都市公社文化財調査事務所（沼沢豊）調査。後湮滅。資料は千葉県文化財センター保管。

7号墳

調査が不完全なため詳細はわからない。内部施設は軟砂岩による箱式石棺と思われる。棺内から直刀1、刀子1、鉄鏃11~12、飾金具1、勾玉9、棗玉5、白玉10が出土。なお報告書の主体部の記述には疑問が多い。

8号墳

道路工事によりカットされた崖面に周堀の断面が露出し、古墳と判断されたというのが詳細はわからない。

以上、昭和47年、栗本佳弘調査。資料は千葉県文化財センター保管。

生浜古墳群 千葉市南生実町(311)

村田川下流北岸台地上、かなり奥部に所在し、赤塚支谷と呼ばれる谷に面する。約20基からなる古墳群で、このうち6基を調査。なお西側小支谷をはさんだ対岸に、鬼高期の一集落である有吉遺跡があり、古墳群との関係が注目される。

1号墳

径14.5m、高さ1.5mの円墳。封土外に幅3m程のテラスがめぐり、その外側に幅3mの周堀が一周する。周堀外縁径は26m。西側で、周堀外壁が幅10m、奥行6.5mの範囲で舌状に張り出す。墳丘構築は、墳裾部にドーナツ状に土を盛り、次にその内側に土を水平に盛る手法をとる。内部施設は未検出。周堀内より土師器杯(鬼高式)が出土。

2号墳

径約17m、高さ1.5mの円墳。盛土の範囲は径13~14m、高さ1.2mと判明。墳丘外に幅3.5~5mのテラスがめぐり、周堀は幅1~3mで一周。周堀外縁径、東西27m、南北24m。墳丘構築方法は1号墳と同様な方法をとる。南側周堀に開口する横穴式石室をもつ。単室で羨道を付設しない。室長2.05m、幅0.7~0.75m。石室ほり方は、長さ4.7m、奥幅3.6m、前幅3.6mの不正長方形。石室内から直刀3、刀子1、鉄鏃33、耳環4が出土。追葬が行なわれた公算が大きい。周堀中より須恵器(長頸壺1、杯身1)が出土。

3号墳

径18m、高さ1.25mの円墳。盛土は径11~12mの範囲。テラスを有すが、周堀に対してやや北東に偏する。したがって、テラスは墳丘の南西側が最大幅(3.5m)となる三日月状を呈する。幅2~3mの周堀が一周。外周径20mでほぼ円形。積土の方法は1号墳と同じ。内部施設及びそれに伴う遺物は検出されなかった。周堀中より土師器(甕、鬼高式)が出土。

4号墳

径約15m、高さ1.5mの円墳。実際の盛土は、径12~13mの範囲。幅1.3~3.5mの周堀が一周する。外周径は約29m。積土方法は1号墳と同じ。南東周堀壁に開口する横穴式石室をもつ。石室掘形は長さ約4.7m、中央幅3.4mの隅丸長方形。石室は単室の両袖式で、羨道を付設しない。長さ2.10m、中央幅0.85m、奥壁幅0.93m。直刀1、刀子3、鉄鏃1、耳環が出土。床面の一部で、破碎された主にシオフキの貝殻が各10余個体分づつ検出された。

5号墳

径14.5~15.5m、高さ1mの円墳。実際の盛土範囲は径10m程。幅3~4.5mの周堀が一周する。外周径約19.5m。内部施設及びそれに伴う遺物は検出されなかった。西側周堀より約4m浮いて、破碎された須恵器(短頸壺)が出土した。

6号墳

北側は区域外にかかるため、南側の約半分を発掘。封土はまったく遺存しない。幅2.5~4.5mの周堀があり、ほぼ円形にめぐるが、北東、南西部分で幅約5.5mにわたって途切れる。前

方部の短い、前方後円墳の可能性もある。

昭和50～51年、日本住宅公団千葉東南部地区土地区画整理事業に伴い、千葉県文化財センター（種田斉吾）調査。後湮滅。資料は同センター保管。

戸張作古墳群 千葉市東寺山町（281・316）

都川の支流、葭川の東岸台地上に所在。小支谷をへだてた南側に石神2号墳以下の古墳群がある。前方後円墳を含む十数基からなる古墳群でこのうち8～14号の7基を調査。なお1～6号は、調査の結果、歴史時代の塚と判明。

8号墳

墳丘長23.5m、後円部径19.5m、前方部幅15mの前方後円墳。幅2.5～4mの周堀が後円部からくびれ部にかけてめぐり、前方部前面では途切れる。内部施設はくびれ部中央で検出。墳丘主軸上に長軸をとる。長さ4.17m、幅2.06m、深さ0.4mの土壌内に、長さ2.43m、幅0.65mの木棺痕が残る。棺内からは直刀2、刀子5、鉄鏃14が出土。7世紀中葉。

9号墳

径約23m、高さ2.6mの円墳。幅2～3mの周堀が一周する。長さ約1.9m、幅0.8m、深さ0.4mの土壌に、長さ1.5m、幅0.4mの木棺を埋納。直刀1、刀子3、鉄鏃5、ガラス小玉42が出土。周堀内より土師器（杯5）、須恵器（杯1）、緑泥色片岩製紡錘車1が出土。

10号墳

遺存状態不良の為に本来の形状は不明。現状は一辺8m程の方墳状を呈す。近世以降の構築物の公算が強い。

11号墳

径約12m、高さ1～1.75mの円墳。幅2～2.5mの周堀が一周する。墳頂下に正確な規模、形状は不明ながら、木棺直葬施設を検出。直刀3、刀子2、鉄鏃7が出土。周堀内より須恵器（杯、甕）、土師器（杯、碗）が出土。7世紀中葉と推定される。

12号墳

径約9mの円墳。墳丘はほとんど遺存せず。幅0.7～1.3mの周堀が一部を除きめぐる。内部施設は未検出。周堀内より土師器片出土。

13号墳

墳丘長20m、後円部径15.5m、前方部幅9.5mの前方後円墳。前方部西面。幅約3.5mの周堀が一周する。内部施設は、くびれ部中軸線上で検出。長さ4.9m、幅2.25mの長方形の土壌内に、長さ3.3m、幅1.1mの木棺痕を検出。刀子1、碧玉製管玉5、白玉1、小玉12が出土。周堀内より土師器（杯）、須恵器（杯、提瓶）が出土。

14号墳

墳丘長23m、後円部径18～19m、前方部幅12.5mの前方後円墳。前方部西北面。幅約3mの

周堀が後円部からくびれ部までめぐり、前方部では途切れる。内部施設はくびれ部中央にあり、墳丘主軸上に長軸をとる。長さ3.4m、幅1.8mの土壇底に、長さ1.72m、幅0.35～0.49mの小土壇を掘り込んで棺とする。直刀1、刀子1、鉄鏃30が出土。他に後円部攪乱土内より直刀1が出土。後円部墳頂部にも内部施設のあった可能性がある。周堀内より須恵器（短頸壺）出土。

昭和50年、千葉県文化財センター（矢戸三男）調査。京葉道路建設に伴い湮滅。資料は房総風土記の丘資料館保管。

石神古墳群 千葉市東寺山町（298・318）

石神2号墳

葭川の東支流に面する台地上に所在。直径30m、高さ3mの墳丘をもつ円墳で、幅5～6mの周堀が一周する。外周径42m。長さ6.8m程の割竹形木棺の痕が墳頂下1m程で検出された。粘土を小口部と両側壁に充填。棺内から石枕2個が出土。北側の枕には、立花9、石製模造品の刀子10、鎌1、白玉613、鉄製模造品を含む鉄製品13、剣2、南側の枕には立花9、石製模造品の刀子10、鎌3、勾玉1、白玉1241、鉄製品5が伴い、棺中央に小刀子1があった。5世紀中葉と推定される副葬品の組み合わせと墳丘下の和泉式土器を伴う住居址との矛盾が指摘された。

昭和50年、千葉県文化財センター（沼沢豊）調査。京葉道路建設に伴い湮滅。遺物は文化庁保管。

3号墳

東西8.1～8.3m、南北8.5mの多少いびつな円墳で、封土はすでに削平されていた。幅0.95～1.7mの周堀が一周する。外周径10.9～11.2m。周堀内から和泉式土器の完形品等が出土している。5世紀後半代か。

4号墳

封土及周堀の一部が削平されていた。西辺約10m、東辺8mの方墳。内部施設は未検出。周堀内から土器片及銅鏃1出土。銅鏃は南側周堀の内壁に半身が幾分喰い込んで出土。土器は五領期のものが過半をしめるが、和泉期的なものもある。5世紀中葉か。

5号墳

径約15m、幅2.5～3mの周堀が一周する円墳。外周径20～21m。封土は第二次大戦後削平された。周堀底に長さ2m、幅0.55～0.6m程の土壇があったが、本古墳に伴うものかどうかは不明。周堀内から五領期を中心とする土器片が出土し、和泉期のものを含む。5世紀中葉か。

6号墳

径12～14m、東西にやや長い円墳。幅2～2.5mの周堀が一周する。外周径17～17.5m。封

土はすでに削平されていた。周堀中より古墳時代以降の鉄鏃1が出土。周堀が五領期の住居を切り、鬼高期にはほぼ周堀は埋っている。五世紀中葉から後半か。

(以上、石神2号墳に同じ)

仁戸名古墳群 千葉市仁戸名町(193)

東京湾に注ぐ都川水系の小支谷に面する台地上に所在する。前方後円墳1、円墳5からなり、付近には小規模な古墳群がいくつか分布する。

1号墳

径16.8m、高さ1.4mの円墳。幅1.5～3mの周堀がめぐる。墳頂下約1mで木棺直葬施設を検出。木棺は長さ2m、幅0.6m、両小口に多量の粘土を充填する。出土遺物なし。盗堀はうけていないので、元来副葬がなかったか、あったとしても腐朽しやすいものだったと推定。

2号墳

ほぼ西面する前方後円墳。墳丘長31.5m(復元)、後円部径19.5m、高さ2m、前方部幅14m、高さ1.5m。周堀は浅く、全形は不明。後円部墳頂より南寄りの位置で木棺直葬施設を検出。長さ3.1m、幅0.4m。少量の粘土を使用。直刀1、刀子1、鉄鏃19と白歯一本が出土。本来は複数の内部施設を蔵すものだったと思われる。

3号墳

径23m、高さ3mの円墳。幅2～3mの周堀がめぐる。墳丘北半の封土内中段で多量の焼土、灰、炭化物粒よりなる層が検出され、160個体以上の土器(若干の須恵器を含む)と鉄剣、刀子1が出土。また墳頂下にも焼土、灰の層があり、近くから土師器24個体が出土。築造の各段階における何らかの祭祀の痕跡であろう。墳頂よりやや南に寄った位置に、主軸をほぼ東西にとる木棺直葬施設を検出。長さ2.2m、幅0.4m、両小口に多量の粘土を充填。直刀1、ガラス丸玉1、小玉2が出土。

4、5号墳

調査の結果、近世以降の塚と判明。

6号墳

径15.5m、高さ1.8mの円墳。幅3～5mの周堀がめぐる。墳頂下1mで木棺直葬施設を検出。長さ2.7m、幅0.6m、粘土を用いない。直刀1、刀子1、鉄鏃1、釘1が出土。本施設の南1m程の位置に、形状不明の別施設があり、須恵器大甕一個体分の破片と桂甲小札多数(100以上)が出土。

昭和47年、坂井利明調査。県立千葉南高校建設に伴い湮滅。

中原古墳群 千葉市平山町(98・99・238・280)

東京湾に注ぐ都川の水源地付近の台地上に所在する。前方後円墳3、円墳6の計9基からな

る。本古墳群の北側、小支谷をはさんだ対岸台地上には前方後円墳2、円墳1からなる塚原古墳群が所在する。

1号墳

墳丘は削平をうけており、本来は径15m、高さ2m程の円墳と推定。内部施設はすでに半壊し、よくわからないが、墳丘裾に地山を掘りこんだ土壌内に木棺を収納したものと推測される。直刀2、鉄鏃24が出土。

2号墳

径19m、高さ2mの円墳。南側裾部に地山を掘りこんだ長さ3.5m、幅1～1.7m、深さ0.4mの土壌をもうけ、墳底にさらに長さ2.85m、幅0.8m、深さ0.3mの細長い墳を掘り、両端に粘土を充填する。粘土間の約2mが木棺の規模と推定。刀子1、鉄鏃2が出土。

3号墳

西面する前方後円墳。墳丘長33m、後円部径20m、高さ3.2m、前方部幅19m、高さ1.9m。南側くびれ部に、地山を掘りこんだ長さ3.3m、幅1.3m、深さ0.25mの土壌をもうけ、木棺をおさめる。粘土は用いない。直刀2、耳環5（金銅製2、鉄製2、鉛製1）、ガラス小玉120が出土。

4号墳

ほぼ西南面の前方後円墳。墳丘長35m、後円部径18m、高さ2m、前方部幅15m、高さ0.5m。東側くびれ部の地山下に箱式石棺を蔵す。内法長2.2m、幅0.65～0.75m、高さ0.9m。砂岩の切石を用い、3～4段積み上げる。石棺の長軸は後円部中心点を指す。直刀2、刀子2、鎌1、鉄鏃20が出土。

5号墳

ほぼ西面する前方後円墳。墳丘長28m、後円部径18m、高さ2m、前方部幅7m、高さ0.5m。くびれ部中央、墳丘主軸上に土壌をもうけ木棺をおさめる。両小口に粘土を充填。粘土の間隔1.85m、幅は0.7～0.8mで、これが木棺規模とみられる。直刀1、刀子1、鉄鏃が出土。

昭和34年、早稲田大学（中村恵次、市毛勲）調査。袖ヶ浦カントリークラブ造成に伴い湮滅。なお、本古墳群中出土と伝えられる人物埴輪（女子立像、ほぼ完形）が県立千葉高校に保管されている。

鈴子遺跡（県立コロニー内遺跡） 千葉市誉田町1丁目（283）

都川南支流の水源付近の台地上に所在する。中原古墳群の南1.3kmに位置する。方形周溝墓に類する12基の遺構を検出したが、溝中からの出土遺物は僅少で、縄文式土器以外では平安時代の所産にかかる土器を出土する。古墳時代以降の所産にかかる公算が強い。台状部一辺3mという小型のものから、6～7mをはかるものまで規模は多様で、辺の向きもまちまち。内部施設はもたないが、004号址だけは横穴式石室類似の施設を伴う。

004号址

台状部一辺7m強、幅2～2.5mの周堀が一周する。各辺を正しく東西南北にとる。台状部南半に白色粘土によって横穴式石室類似の施設を設ける。地山を掘りこんで、内法長3.05m、幅1.23～1.36mの長方形に、厚さ0.3～0.5mの粘土でかこう。粘土壁の高さは0.55m遺存。床面はローム層で、奥壁より $\frac{2}{3}$ の範囲に木炭を敷く。南側小口部が開口し、周堀壁までの間に、幅0.28～0.68m、長さ1m程の溝を掘り、墓道の如く加工。出土遺物はなし。北側の周堀中で、焼成後に底部を穿孔された完形の須恵器（高台付長頸瓶）が覆土中位で出土。また国分式の土師器（杯1）が出土。ともに混入品と考えられるが、本址の造営期を推定する手がかりにはなる。本址は古墳時代終了後、国分期以前ないし初期までの間の所産にかかる公算は大きい。

昭和50年、千葉県文化財センター（菊池真太郎）調査。県立障害者総合福祉センター建設に伴い湮滅。

兼坂古墳群 千葉市加曾利町字和田（209・213・217）

都川下流北岸台地上に所存する。円墳4、小形方墳2からなる。

1号墳

墳丘は古く削平。径18～22mの不整形に、幅1.5～4mの浅い周堀がめぐる。中心より南西に片寄った位置に、地山を掘りこんで箱式石棺を設置。雲母片岩の板石を用る。4体分の人骨と、金銅製耳環1、管玉1、刀子1、ガラス小玉1が出土。周堀中より須恵器片若干出土。

昭和41年、整地工事に伴い新発見。千葉市教育委員会緊急調査。

2号墳（聖人塚古墳）

径20m、高さ1mほどの墳丘が遺存。幅3m程の周堀がめぐるが、全体に不整。内径約27m、南西裾部に、地山を掘りこんで木棺直葬施設2基を設置。第1施設は粘土をかなり多量に使用。長さ3.2m、幅0.9～1m。直刀2、鉄鏃6、耳環が出土。第2施設は長さ2.3m、幅1.1m、粘土、出土遺物を見ない。周堀中より須恵器（甕1）、土師器（杯）が出土。

3号墳

墳丘なし。一辺9.6～10mの方墳。周堀が一周。台状部1、周堀内2の土壙を検出。台状部のものは粘土を使用。ともに遺物皆無。

4号墳

墳丘なし。一辺7.6～9mの方墳。台状部1、周堀内で2基の土壙を検出。前者は粘土を用いる。ともに出土遺物なし。

5号墳

墳丘なし。径9.1mの円墳。周堀一周。内部施設なし。周堀内より和泉式の甕出土。

6号墳

墳丘なし。径13.6mの円墳。周堀一周。内部施設なし。周堀内より和泉式の杯2出土。

1号方形周溝址

一辺5.2～5.7mの台状部をもち、五領式の壺1を出土。

以上、昭和47年、千葉県都市公社文化財調査事務所（三森俊彦）調査。京葉道路建設に伴い湮滅。資料は房総風土記の丘資料館保管。

平山古墳 千葉市平山町（330）

都川南支流の水源付近の台地上に所在し、南方至近の距離に塚原古墳群、中原古墳群が存在す。径18m、高さ1.8mの円墳。周堀が一周し、外周径24m。内部施設は未検出。周堀覆土中から須恵器（台付長頸瓶）1、土師器（椀）2が出土。

昭和52年、千葉県文化財センター（杉山晋作）調査。千葉東金バイパス建設に伴い湮滅。

七廻塚古墳 千葉市生実町字峠台（99・102・238・280）

村田川の河口デルタに面する台地上に所在し、付近には大覚寺山古墳があり、有力な古墳群を形成していた。径54m、高さ8.8mの大円墳。墳頂部に戦後忠霊碑が建ち内部施設をかなり破壊。内部施設は3基あり、いずれも両端に粘土をあてる木棺直葬施設。他に石製模造品等を一括埋置した施設1があった。第1施設は主軸を南北にとる。北端部を残すのみで他は碑により破壊。第2施設は第1の南に、東西に主軸をとって設置。長さ6m、幅0.5～0.6m。東端部で立花5、直刀1、鉄銚2、鎌、鉄斧等出土、第3施設は第1の西方に、主軸を北東に傾けて設置。北半をすでに失うが、遺存部で立花5、鉄剣1、鉄銚2、鉄製農工具が出土。第1施設の東、第3施設と対応する位置、方向で、長さ1.2m、幅0.5mの範囲で石製模造品等を一括埋置した施設を検出。粘土は用いない。小型仿製鏡1、滑石質の大型、特殊な石釧1、石製模造品（刀子17、鎌2、斧4、剣1、不明棒状品2）が出土。5世紀中葉。

昭和33年、生浜中学校校庭拡張工事に伴い、武田宗久調査。後湮滅。遺物は千葉市教育委員会文化課保管。

大覚寺山古墳 千葉市生実町字大覚寺脇（160・220・238・280）

昭和44年、宅地造成に先立つ伐採により新発見。明治大学考古学研究室他により測量され、墳丘長62m、後円部径30m、前方部幅25mの前方後円墳と判明。古式古墳に類するプロポーションを有する。千葉市内では最大の古墳であり、昭和46年、県指定史跡として保存。

狐塚古墳 千葉市今井町（127・238・280）

東京湾岸平野に突出した台地上に所在する。湮滅寸前のところを緊急調査したが、すでに破壊が甚しかった。墳丘長54mの南面する前方後円墳とされるが、円墳2基が南北にならんだも

のかもしれない。周堀は未検出。「後円部」に粘土の散布が認められた。管玉1出土。

昭和39年、武田宗久調査。後湮滅。

新山古墳群 千葉市加曾利町字新山 (238・280)

都川の中流、二支流の分岐点北岸台地上に所在する。前方後円墳2、円墳1が近年まで遺存。

1号墳

墳丘長30~40m程の前方後円墳だったらしい。前方部北東面。後円部墳頂近くで粘土塊と雲母片岩の板石破片が出土したので、箱式石棺が設置されていたのだろう。

昭和41年、土取り工事に伴い千葉市教育委員会調査。後湮滅。

2号墳

墳丘長25m程の前方後円墳。前方部南西面。破壊が甚しく内部施設未検出。周堀の存否不明。

昭和42年、土取り工事に伴い加曾利貝塚博物館調査。後湮滅。

3号墳

明治年間、土木工事によって削平。雲母片岩を用いた箱式石棺が蔵されていたという。円墳だったとされるが、近年の調査(年次不詳)によっても、周堀のプランは判明しなかった。

内野5号墳 千葉市多部田町字内野他 (292)

都川中流で分岐した二支流のうち、北支流の南岸台地上に所在する。前方後円墳1、円墳7からなる古墳群中の1基。半壊していたが、径30m、高さ1.5m程の円墳と推定。幅1.5~2.5mの周堀がめぐり、外周径36~38m程の南裾部に地山を掘りこんで箱式石棺を設置。雲母片岩の板石を用いる。長さ約2m、幅0.6m。数体の人骨と直刀2、刀子数本、鉄鏃数本が出土。

昭和47年、市営霊園(平和公園)造成に伴い加曾利貝塚博物館調査。後湮滅。他の古墳は公園内に保存。

荒久古墳 千葉市青葉町荒久 (65・99・238・280)

東京湾から湾入する千葉寺谷の最奥部に所在する。北東約600mには奈良時代の創建になる千葉寺がある。一辺20m程の方墳とみられる。長さ2.07m、幅1.2~1.4mの玄室だけからなる横穴式石室が開口。凝灰質砂岩の切石からなり、さわめて整美、堅牢。明治24年に盗掘され、遺物は散佚。その後の調査(年次不詳)で人骨一体分、琥珀製瓊玉3、鉄製馬具破片が出土したという。

へたの台古墳群 千葉市仁戸名町字作山、辺田台 (238・280)

東京湾に注ぐ都川の本流を約4kmさかのぼった地点で南へ分岐する仁戸名支谷に面する台地上に所在する。せまい尾根上に円墳5基が散在。

1号墳

径18.5m、高さ1.2mの円墳。周堀がめぐり、外周の径は28m弱。すでに墳丘の削平をうけ内部施設は未検出。墳丘表土中で石製模造品（鏡）が出土。

2号墳

径15.5m、高さ2mの円墳。周堀が一周し、外周径は21m。墳頂下に木棺直葬施設を設置。長さ2.5m、幅0.7m。小口部に粘土塊をあてる。直刀1、刀子2、管玉2、切子玉2、ガラス玉68、鉄環2が出土。

3号墳

径18.4m、高さ3mの円墳。周堀が一周し、外周径は27.5m。墳頂下に長さ2m、幅0.5mの木棺直葬施設を設置。小口部に粘土塊をあてる。直刀1、刀子、琥珀製棗玉18が出土。

4号墳

径13.2m、高さ1.8mの円墳。周堀が一周し、外周径は15m。裾部に長さ2.2m、幅0.65mの木棺直葬施設を置く。ガラス小玉百数十個を出土。これに並行して、長さ1.5m、幅0.5mの木棺直葬施設を検出、鉄製轡金具片2、鉄鏃1が出土。

6号墳

径12.5m、高さ1.8mの円墳。浅い周堀がめぐり、外周径16m。墳丘中心の旧地表を掘りこんで木棺を埋置。小口部に粘土をあてる。長さ1.8m、幅0.7m。直刀1、鉄剣1、刀子十数口を出土。

昭和43～44年、小学校建設に伴い加曾利貝塚博物館調査。後湮滅。なお5、7、8号は調査の結果、後世の塚と判明。

武石遺跡周溝址 千葉市武石町1丁目（313）

花見川に沿って形成された大小の支谷上に所在。標高約20m、水田との比高差約10mである。

1号址

西側及南側を欠く。円形を呈す。径約20mほどと推定される。内部施設なし。

2号址

西側は道路によって削平。円形を呈す。径約20m。幅1.7～3.2m、深さ約0.4～0.7m。内部施設なし。

昭和51～52年、関東地方建設局千葉地方法務局建設にともない、日本文化財研究所（森重彰文）調査。

すすき山遺跡周溝址 千葉市源町すすき山（238・280）

都川の支流にのぞむ舌状台地上に所在。標高約28m。

1号址

6.8×6.0mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。周溝から土師器片出土。

2号址

5.7×5.2mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。周溝からの遺物もなく時期不明。

3号址

3.6×3.6mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。周溝内から土師器片出土。

4号址

現在径4.5m(東西)の不整円形を呈す。埋葬施設なし。周溝内より土師器、須恵器片出土。

5号址

3.7×3.5mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。出土遺物なし。

6号址

5.8×5.6mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。出土遺物なし。

7号址

5.9×6.0mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。出土遺物なし。

8号址

4.6×4.4mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。出土遺物なし。

9号址

5.3×5.3mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。須恵器片出土。

10号址

6.8×6.2mの隅丸方形を呈す。埋葬施設なし。須恵器片出土。

昭和45年、宅地造成にともない加曾利貝塚博物館調査。

東五郎遺跡周溝址 千葉市大宮町(312)

都川に面する河岸段丘上に所在。標高約34m。東側及南隅は未調査。一辺約11.3mの方形と推定。溝はU字形を呈す。他の遺構との切合いから鬼高期以前、和泉期に属するものと推定される。

昭和48年、土砂採取工事にともない発見。平野考古学研究所調査。

石神1号墳 千葉市東寺山町(238・280)

千葉県文化財センター調査の石神2号墳の南西約150mの所に所在。戦後削平の際、石製模造品(立花、刀子)が出土した。

出土遺物は県立千葉高校保管。

高品第2遺跡A地点周溝址 千葉市高品町(217)

都川の一支出谷である貝塚支谷の西側、東田川によって形成された洪積台地上に所在する。小

谷津をはさんで西をA地点、東をB地点とよぶ。東田川をはさんで東寺山古墳群が所在。

第1号周溝址

本址は、東西に走り、幅2～3m、長さは検出部分で約12m、底面に段を有す。切合いから第2号周溝よりも古い。内部より土師器、須恵器片出土。

第2号周溝址

南北に長くのびる。幅約2.5m、検出部分の長さ約35m。第5周溝を切る。

第3号周溝址

南北に走る幅1.5mの溝。検出部分の長さ約11m、性格は不明。

第4号周溝址

幅1mほどの溝、検出部分の長さ6.5m。性格不明。

第5号周溝址

隅丸方形に近いものと推定。一辺約17m。幅2～3の周溝が一周するものと思われる。埋葬施設は中央部が未調査のため不明。周溝内から土師器（鬼高期）を検出。

第6号周溝址

幅約1mの溝、検出部分長さ約14m。溝中央部に長さ3m。幅1.8mの土壙あり。

第7号周溝址

幅1.5mの溝、検出部分の長さ約9.5m、性格不明。

昭和46年、京葉道路建設にともない千葉県都市公社古内茂)調査。

荻生道遺跡 千葉市小食土町

村田川の上流。標高約90m。円墳の残欠を3基調査。詳細不明。

昭和51～52年、駐車場用地造成にともない千葉市教育委員会(市川勇)調査。

椎名崎遺跡 千葉市椎名崎町(326)

村田川右岸の千葉市東南部丘陵上で小金沢支谷の北側台地上、円墳を2基調査。

昭和51～52年、土地区画整理事業にともない千葉県文化財センター(種田斉吾)調査。

人形塚1号墳 千葉市椎名崎町(326)

村田川によって形成される沖積平野を望む台地上。土地区画整理事業に伴う記録保存。人物埴輪がみられ現状保存、前方後円墳。人形塚2号墳は1号墳に近接して所在、現状保存。

孤塚1号墳

円墳、盗掘により主体部不明。ガラス玉、直刀、刀子が出土。

孤塚2号墳は円墳、土壙、直刀、刀子、鉄鏃が出土。

昭和51年 千葉県文化財センター（中村恵次、栗本佳弘）調査。

六通古墳群1号墳 千葉市大金沢（326）

村田川の小支谷に北面する台地上。直径29mの円墳。埋葬施設は横穴式石室及土壙。周堀あり。石室内より直刀2、鉄鏃、人骨、金環2、メノウ玉1、切子玉1、丸玉3、白玉（3）、甗玉1、金銅製玉4、須恵器、土師器、羨道内より直刀1、鉄鏃、土壙内より直刀1、鉄鏃、須恵器、土師器が出土。

2号墳

一辺18mの方墳。周堀あり。埋葬施設は横穴式石室、人骨、須恵器出土。

昭和51年、土地区画整理事業にともない、千葉県文化財センター（豊田佳伸）調査。

城の腰遺跡（大宮第一遺跡） 千葉市大宮町（332）

都川に望む舌状台地上。標高23m。周溝状遺溝8、主体部1を検出。

昭和51年、道路建設に伴ない、千葉県文化財センター（野村孝希他）調査。

小金沢三山古墳群（小金沢1号墳） 千葉市小金沢（326）

村田川の小支谷に東面する台地上。径26mの円墳、墳丘の大部分は失なわれていた。埋葬施設は横穴式石室が2基並列している。

刀子、耳環、ガラス玉、甗玉、メノウ丸玉、須恵器が出土。6世紀後半と推定。

昭和51年、土地区画整理事業にともない、千葉県文化財センター（田坂浩）調査。

北生実所在古墳 千葉市北生実（17）

直径約10m（約5間）、高さ約4尺（約1.3m）。東方中腹より水晶曲玉1、漢式鏡破片3出土。明治42年県立生実学校敷地拡張に伴ない検出。

塚原古墳群（238・280）

中原古墳群の北側台地に所在。前方後円墳2、円墳1。千葉市史記載の人物埴輪は本古墳群中の出土の可能性が有る。県立千葉高校保管。

〔18. 習志野〕

鷺沼A号墳 習志野市鷺沼（137）

東京湾に面する台地上に所在する。中世の鷺沼城内にとりこまれ、墳丘は改変されて土塁として利用されている。周堀のみ調査され、その結果前方部（西南面）の短小な前方後円墳と判

明。幅2～3mで、後円部横と前方部前面で途切れる。後円部径18mほど。内部施設はボーリング探査によって、くびれ部中央に砂岩を用いた施設（おそらく箱式石棺）のあることが確認されている。周堀内から円筒埴輪の破片多数と形象埴輪（人物、馬）の破片若干が検出された。6世紀後半。

昭和41年、群馬大学（藤岡一雄）調査。

鷺沼B号墳（137）

鷺沼A号墳のすぐ南側に所在する。後世の城によって破壊されていたが、周堀の調査によって前方部の短い前方後円墳と推定される。A号墳同様前方部は西南に面する。やはり前方部前面には周堀がめぐらない。規模はA号墳より若干小さいものだったらしい。周堀内からはほとんど埴輪片の出土がなく、本来墳丘上に樹立されていたものと思われる。くびれ部中央に砂岩製の箱式石棺の盗掘痕があり、さらにその東側にも砂岩製の箱式石棺があった。これは内法で長さ1.98m、幅0.80mほどで、砂岩の切石を積んでつくられ、床面にも切石を敷く。盗掘されていたが、内部から人骨片、直刀、鏢、刀子、鉄鏃がいずれも破片で出土した。また径17mmほどの土製の白玉が1個あった。7世紀前半。

昭和41年、群馬大学（藤岡一雄）調査。石棺は習志野市指定文化財として保存。

〔19. 船橋市〕

竹ノ越古墳 船橋市海神（84）

台地上。大正5年、京成線工事の土取りを近くの貝殻台で行なった際、土偶などとともに形象埴輪、円筒埴輪が出土した。墳形、規模、主体部、副葬品などは全く不明。

船橋市郷土資料館保管。

峯台古墳 船橋市宮本（84）

台地上に位置する。明治9年、耕作により破壊された際に箱式石棺と考えられる主体部が露出した。墳形、規模、副葬品などについては全く不明。

海神古墳 船橋市海神（84）

台地上の宅地内に現存する。航空写真により円墳であることが判明。未調査。

夏見大塚遺跡 船橋市夏見（249）

東京湾岸の沖積地に面する台地端部に所在する。4隅の途切れる方形周溝址1が検出されている。台状部の軸長5.5～6.0mほどで、溝幅は中央の最も幅広い部分で1mほど。両側の溝中央に、溝底面からの深さ0.1～0.2m、長さ1mほどの土墳があった。この土墳覆土上で埴形の

壺が1個出土している。

昭和48年、宅地造成に伴い八幡一郎他調査。後湮滅。

夏見大塚遺跡周溝址 船橋市夏見

海老川にのぞむ小支丘上に所在。標高約20m、水田との比高差約15m。

1号址

溝の長さ北西で4.6m、南東4.9m、北東5.5m 南西5.4m。四隅の切れる形態。内部施設なし。北西溝の溝底ほぼ中央に、深さ0.1~0.2mの土墳があり、内部より小形壺形土器が出土。

2号址

一辺9mほどの直角にまがる2辺のみを検出。幅0.5~1m、深さ0.2~0.3m。顕著な出土遺物なし。

昭和48年、宅地開発にともない船橋市教育委員会（松浦有一郎）調査。

〔20. 市川市〕

法皇塚古墳 市川市国府台（339・346）

東京医科歯科大学構内に所在。江戸川を臨む下総台地の西端に位置する。復元推定で墳丘長54.5m、後円部径27m、同高さ5.7m、前方部幅35m、同高さ5.6mをはかる前方後円墳。後円部のくびれ部付近で石列、墳丘の西側部分では人物・家形などの形象埴輪片と円筒埴輪片が検出された。周堀は未確認。後円部には墳頂下2mの位置に凝灰岩質砂岩を用いた全長7.5mの片袖式横穴式石室が設けられていたが天井部は全く遺存していなかった。玄室内からは、ガラス製霰玉2、管玉9、丸玉296、銀製中空丸玉4、銅剣2、金環1、帯状金具2、太刀2、鉄製銀象嵌鏝1、刀子9、鉄鏃90 衝角付冑1、桂甲1、轡2、鞍1、雲珠3、辻金具3、鏡1、鉸具2、半球形飾金具67、などが出土した。6世紀前葉に比定される石室構造と中葉以降と考えられる副葬品セットとの矛盾は追葬による時間差であると推定された。

昭和44年、明治大学（小林三郎）調査。調査後保存。遺物は市立市川博物館保管。

弘法寺古墳 市川市真間（339）

弘法寺境内に所在。須和田丘陵の最西端に位置する。復元推定で墳丘長43m、後円部径20m、同高さ3m、前方部幅15m、同高さ3mをはかる前方後円墳。測定の結果から6世紀後半の造営と推定された。

昭和45年、市川市教育委員会が墳形のみ測量調査。調査後保存。

真間山古墳 市川市真間（339）

真間山に所在。弘法寺古墳からは東へ200mの地点に位置する。未調査のため内容は不明で

ある。現状では、直径20m、現高2.5mの円墳と考えられる。

太鼓塚古墳 市川市須和田 (339)

須和田丘陵のほぼ中央に占地する。昭和18年、忠霊堂建設のため削平。一辺約24m、高さ5mをはかる二段築成の方墳。墳頂下1.3mの位置から鉄製小刀1を検出。木棺直葬と考えられる。7世紀前半の築造と推定。

明戸古墳 市川市国府台 (339)

里見公園内に所在。江戸川沿いを南北に走る丘陵の南端に位置する。地形が著しく変形を受けているため墳形、規模などは全く不明。2個の凝灰岩製の箱式石棺が露出しているのみで副葬品の内容も不明。6世紀後半の造営と考えられている。

昭和37年、明治大学調査。石棺は市川市指定の文化財として保存。

〔21. 松戸市〕

小金1号墳(愛宕塚) 松戸市小金 (97)

江戸川の東岸台地上に所在する。径23m、高さ3.5mの円墳状を呈すが、古く鉄道工事や宅地によって墳裾まで削られており、本来の墳形は不明。工事の際円筒埴輪多数と形象埴輪1片が採集された。円筒埴輪には×印や横一線の刻文をもつものが多い。いわゆる下総型円筒埴輪とは異系統の埴輪であるとされる。

昭和35年、松戸市史編纂委員会により実測調査。

栗山古墳 松戸市栗山 (97)

江戸川下流東岸の台地上に所在し、松戸市域の最南端に位置する。南約1kmに市川市法皇塚がある。古くは数基の古墳があったらしく、周囲には広く円筒埴輪の散布が見られたという。径15m、高1.5m程の円墳状を呈する。かつて形象埴輪(人物5、馬2、太刀1)が出土したといわれ、その一部が現存している。

未調査。

河原塚古墳 松戸市河原塚 (88・171)

市川市須和田付近からつづくいわゆる国分谷の最奥に所在する。貝塚上に築かれ、封土中に多量の貝を含み、表面は純貝層でおおわれる。径25m、高さ4mの円墳で、幅5m程の浅い周堀がめぐる。内部施設は2か所あり、1は墳頂部より北側2.8mの位置にある。両端に粘土塊をあてたもので、その間の長さ2.3m程、鉄釘が出土したので箱形木棺が収められたものと推定されている。人骨が良く遺存し、頭を東にした伸展葬で、ガラス小玉10、鉄剣1、直刀1、

鹿角製刀装具1、鹿角装刀子2、鉄鏃9、鉄釘1を伴う。2は墳丘南側斜面にあるが残りが悪く構造は不明。少量の人骨と、鉄剣片1、直刀片1、鉄製打ちグワ1、須恵器片2が周囲から出土した。この他、墳裾部で石製模造品4（刀子3、紡錘車1）が出土している。5世紀後半。遺物は国学院大学保管。古墳は松戸市指定文化財として保存。

竹ヶ花古墳 松戸市竹ヶ花（112・132）

江戸川の東岸台地上に所在する。自然地形と相まって前方後円墳に似たプランを示すが、調査の結果径22～25m、高さ2.5m程の円墳と判明。墳頂部下に、2～2.5m四方の範囲に粘土、混雑粘土、厚さ0.4～0.5mの大石2個等が検出され、これは箱式石棺が盗掘により破壊された痕跡と推定される。直刀片3、鉄鏃片1、責金具1が出土。6世紀中葉以降の所産と思われるが、決め手に欠ける。

昭和36年、東京教育大学（岩崎卓也）調査。採土工事に先立ち調査、後湮滅。

稔台富山遺跡周溝址 松戸市稔台（170）

通称国分谷の最奥部の台地に所在。東・西溝は耕作によって破壊されていた。北溝幅約1.2m、深さ0.25～0.35m。南溝幅0.9～1.3m、深さ0.2m。台状部は東西約9m、南北約5.5m。南溝に接して南北長2.3m、幅1.2mの土壇を検出。内部より骨粉が出土。内部施設と思われる。土壇内のピット及び周溝内からほぼ完形の土器が出土。周溝内には火を受けた部分も存在し、周溝内出土土器もこの部分からの出土であり、なんらかの儀礼が行なわれたと推測されている。

昭和42年、耕作にともなう土器の出土によって発見、関根孝夫、木下正史調査。

〔22. 流山市〕

新川村古墳群 流山市東深井（44）

1号墳は径12m、高さ1.5mの円墳で、円筒埴輪列をもつ。人物埴輪破片も採集された。内部施設は未検出。2、3号墳は1号墳と「同様でやや大形」、高さ2m程の円墳とされる。2号墳は二重の円筒埴輪列をもち、形象埴輪（馬、人物）をもつ。内部施設は未検出。3号墳は木棺直葬の施設をもち、直刀片1、ガラス小玉1を出土。埴輪の有無については記載がない。4号墳は径12m、高さ3mで、埴輪の散布が見られたのみという。

古い時期の調査であり周堀はすべて未確認、また内部施設の認められなかったものは、木棺直葬施設を見のがしたか、構築位置が墳丘裾にあったのかどちらかであろう。6世紀後半。

昭和23年、国学院大学（樋口清之他）調査。

初石古墳群（38）

江戸川の東岸台地上に所在する。円墳数基からなる小規模古墳群で、4基が調査された。1号墳は径16m、高さ1.5mで、円筒、形象（馬）埴輪の破片を検出。2号墳以下は墳丘規模の報告なし。2号墳は円筒と人物埴輪破片が出土、3号墳は顕著な遺物を伴わない。4号墳では直刀片を検出したが施設の実態は不詳。また円筒埴輪列を伴い、二重に廻る可能性が指摘された。古い時期の調査のため周堀は未確認、内部施設も未検出だが、木棺直葬施設を見のがしたか墳丘裾に構築されていたためかどちらかであろう。

昭和23年、国学院大学（下津谷達男）調査。

東深井古墳群 流山市東深井（43・117・138・156）

江戸川と利根川にはさまれた三角地帯の、江戸川に面する台地上に所在する。小規模な古墳40基などからなる。3次にわたり調査され、1～6号墳は昭和24年国学院大学（下津谷達男）調査。7、8号墳は昭和37年送電線工事に伴い、9～12号墳は昭和42年宅地造成に伴い、いずれも下津谷達男調査。7～12号は調査後湮滅。

1号墳

径21～22m、高さ2.5mの円墳で、中腹に段がある。この段上と裾部に2列の円筒埴輪列がある。内部施設は未確認。6世紀後半以降の所産であろう。

2号墳

径10～11m、高さ0.60mの円墳。埴輪はない。墳丘の南西部に、軟砂岩切石積みの横穴式石室を設ける。盗掘されていたが、直刀片1、鹿角装刀子片1、ガラス玉44を検出。6世紀後半以後の所産であろう。

3号墳

径13m、高さ1mほどの円墳。墳丘の南西部に軟砂岩切石積みの横穴式石室をもつ。玄室の長さ2m、羨道1.10m。盗掘をうけているらしく、鉄鏃と直刀片が若干出土したにすぎない。円筒埴輪列が一周していたらしい。形象埴輪の破片（さしば）も1点出土している。6世紀後半以後の所産であろう。

4号墳

径12～13m、高さ0.80mほどの円墳。墳丘の南西裾部に、軟砂岩切石を用いた施設の存在は確認されたが、破壊が甚しく構造は不明。埴輪、副葬品ともなし。

5号墳

径22～23m、高さ1.40mほどの円墳。内部施設未確認。墳頂部をかこんで円筒埴輪列がめぐるとのほかに、墳丘の北側で形象埴輪（馬）の破片が多量に出土。円筒、形象ともに赤彩されたものが含まれているのは注目される。

6号墳

径19～21m、高さ3mほどの円墳。墳頂部表土直下で直刀1が出土しており、木棺が直葬さ

れたものと思われる。埴輪なし。

7号墳

径13~14m、高さ1.40mほどの円墳。幅2mほどの周堀がめぐる。内部施設は未確認。埴裾に円筒埴輪列が一周する。中段にも一列あった可能性もあるがはっきりしない。墳丘の南側に円筒埴輪列のすぐ内外に形象埴輪数個の列があった。円筒は44本以上確認。形象は、人物1、鶏1、魚1である。

8号墳

径11m、高さ1mの円墳。幅2mの周堀がめぐる。墳頂下60mほどの封土中で刀子片1が検出されたので、木棺が直葬されていたものと思われる。

9号墳

前方部の短小な前方後円墳で、墳丘長21m、径円部径13.5m、高さ1.5m、前方部幅5mをはかる。幅2mほどの周堀がめぐるが、前方部前端では幅せまく、浅くなる。円筒埴輪列が一周していたらしいが、盗掘が著しく配列の詳細は不明。前方部に形象埴輪（人物、馬）があった。内部施設は未確認。

10号墳

径14m、高さ1.30mほどの円墳。幅2.50~3.50mの、幅の一定しない周堀がめぐる。埴輪はなく、内部施設も未確認。

11号墳

径16.5m、高さ1.60mほどの円墳。幅2mほどの周堀は、両側で途切れて陸橋を形づくる。埴輪をもつが、乱掘のため詳細は不明。墳頂下約0.30mで鉄鏃、刀子が出土しているので、木棺が直葬されたものと推定される。

12号墳

径16m、高さ1.50mほどの円墳。幅3mほどの周堀がめぐる。埴輪をもつが、乱掘が甚しく詳細不明。内部施設は未確認。

東深井遺跡周溝址 流山市東深井（190）

利根川に流れ込む小支谷によって形成された小支丘上に所在。標高約15m。

1号址

東西溝長8m、南北溝長7.7m。幅0.7~1.3m。溝底は平坦。溝の内側はほぼ直線を呈すが、外側は若干張出す形態を示す。北溝中央部にはブリッジ状の部分有し、その両側に長方形のピットがある。内部施設なし。

1号周溝址

西側を破壊されている。径12mほどの円形。溝幅1.4m、深さ0.5m。溝底はU字形を呈す。

2号周溝址

破壊が著しく、形状不明。幅約5.4m、深さ約0.9mの溝内からは、円筒埴輪片が多数出土した。古墳の周堀址と推定される。

昭和42年、宅地造成にともない流山市教育委員会（下津谷達男、伊藤和彦他）調査。

〔23. 野田市〕

堤台遺跡 野田市堤台（128）

江戸川に面する台地端部に所在する。調査時には墳丘のまったく認められなかった方形周溝遺構である。周溝の南半分のみ発掘。台状部一辺8mほどで、周溝は幅2.5～3m、深さ0.4～0.6mをはかる。溝内より供献土器7個体を検出。うちわけは壺6、高杯1で、壺5個は焼成後の底部穿孔が施されている。なお溝底に長さ1.7m、幅0.5mほどの長円形のピットがあったが、性格は不明である。

昭和36年、下津谷達男調査。

〔25. 柏市〕

天神台古墳群 柏市柏（43）

手賀沼の最西端の西岸台地上に所在する。円墳8基よりなり、いずれも後世の攪乱が甚しい。3基が発掘され、うち2号墳で直刀片1、円筒埴輪片が検出されたのみ。2号墳は径16.5m、高さ0.7mと群中最大、他は径9m内外であったという。

昭和25年、国学院大学（古宮隆信他）調査。

戸張城山遺跡周溝址 柏市戸張城山台（49・237）

大津川とその支流によって形成された舌状台地上に所在。標高20.7m、水田との比高差約17m。この台地上には、昭和26年調査の「戸張遺跡」、昭和41年調査の「山田台遺跡」、昭和48年調査の「戸張遺跡第3次調査」等の遺跡がある。

昭和26年調査

昭和25年抜根作業中に発見され、26年に古宮隆信によって調査。方形周溝墓と推定される溝のコーナーを確認した。台状部より合口甕棺が発掘された。（昭和52年調査の項参照）。

昭和41～42年調査

山田台遺跡と呼ばれる。弥生時代後期に属すと推定される方形周溝墓を1基検出した。

昭和52年、体育館建設にともない、古宮隆信調査。

1号址

西、南辺の約2分の1のみ調査。南溝は溝幅0.8～1.3m、深さ約0.4～0.5m。西溝は最大溝幅1.8mの部分がある。深さも最大約1.2mを越す部分がある。溝は底及び壁共にかなり硬くロームが固められているという。内部施設らしきものは検出できなかった。周溝内から「前野町

式土器」の出土がみられた。

2号址

長径13m、短径11mのほぼ長方形。溝幅は1.4～1.6m、深さは0.3～0.7m。南側溝中央部で底及び壁の一部に灰白色の粘土が張り付けられていた。台状部東南隅に、長軸2.1m、短径1.4m、深さ0.2mの土壇がある。第一次調査で合口甕棺の出土した位置とされる。台状部北隅は深さ0.1mほどの落ち込みと柱穴群があった。調査者は殯のため等の祭祀的施設の可能性をのべている。

3号址

長径10.8m、短径10m、溝幅0.5～1.4m、深さ0.1～0.4m。北側溝の中央部にブリッジを有し、又東南隅が切れる形態を呈す。東溝の切れる部分に土壇がみられる。台状部の北西部分に土壇1か所を確認したが攪乱が著しく不明確。一応内部施設の可能性がある。

[26. 我孫子市]

日立精機1号墳 我孫子市我孫子(122・157)

手賀沼の北岸台地上の奥まった位置にあり、利根川側から侵入した支谷に面する。西面する前方後円墳で、墳丘長45m、後円部径22m、高さ2.5m、前方部幅23m、高さ2mをはかる。幅2～3mの周堀をもつ。くびれ部中央に、南に開口する横穴式石室がある。玄室は長さ2.40m、幅1.44m、高さ2.15mの長方形で、両袖式軟砂岩の切石積み。玄門外は側壁が崩され、切石が両脇に散乱した状態で、羨道の構造、あるいは複室であったか等不明である。前庭部前の周堀内にも軟砂岩ブロックの集積が2か所あった。後円部墳頂で須恵器大甕の口縁部破片が出土、石室内では盗掘のため遺物は皆無。報告書は7世紀後半に比定。この古墳は前方後方墳のうたがいがあがるが、周堀調査が不十分なため断定できない。

昭和36年、東京大学(藤本強他)調査。

日立精機2号墳 我孫子市我孫子(157・162)

手賀沼の北岸台地上の奥まった位置にあり、我孫子4小古墳の100m北にあたる。西面する前方後円墳で、墳丘長30m、後円部径18m、高さ2.5m、前方部幅21m、高さ2.8mをはかる。幅4～5mの墳丘相似式周堀をめぐらす。くびれ部中央に南に開口する横穴式石室を設ける。軟砂岩の切石積みで、玄室は長さ2.25m、幅1.60m、高さ2m強の長方形プラン、両袖である。羨道は切石一個分の長さしかない短いもので、長さ0.9m、幅1.35mをはかる。石室内は盗掘され、出土遺物は皆無。石室の前方土中より須恵器片が若干出土している。報告書は7世紀初頭に比定。

昭和40年、東京大学(田中義昭他)調査。

我孫子第4小学校古墳 我孫子市我孫子(157)

手賀沼北岸台地上のかなり奥部に所在する。長径25m、短径10m程の長円形の墳丘が遺存する。前方後円墳の崩れたものと思われるが、周堀もはっきりせず、本来の墳形はつかめない。長軸はほぼ東西を向く。くびれ部にあたる部分に南に開口する横穴式石室がある。軟砂岩製で、両袖の複室構造をとる。後室は長さ2.30×幅1.85×高さ1.85m、前室は1.90×1.70×1.85mの長方形。羨道は攪乱により側壁をもち去られており詳細不明。石室内の盗掘が著しく、金銅製耳環1対が出土したのみ。前庭部にあたる部位に須恵器杯蓋1があった。報告書は7世紀中葉に比定。

昭和36年、東京大学(藤本強他)調査。

白山1号墳 我孫子市白山(86・102・157)

手賀沼の北岸台地上の南縁に所在し、計13基からなる白山古墳群中の1基である。径25mほどの円墳、周堀ははっきりしない。埴輪なし。南に開口する横穴式石室は、若干ローム層を掘りくぼめた中に構築されている。長さ4.80m、幅1.10mほどの長方形の玄室は、中央で仕切り石によって前後2室に分けられる特異な構造を示す。後室は長さ2.10m、前室は2.60mほど。両袖。羨道は退化し、玄門の外に長さ0.5mほどの石積みがつづくにすぎない。前後室から多量の遺物が出土した。後室では、直刀8、鏝2、鞆尻金具2、刀子4、鉄鏃片90以上、瑪瑙勾玉6、ガラス勾玉1、水晶切子玉1、土製白玉16、ガラス丸玉23、小玉70が出土。前室では、直刀1、鏝1、刀子2、鉄鏃(破片とも)169、銅鏡1、金環1、水晶勾玉7、同切子玉8、ガラス丸玉6、小玉12が出土した。後室には成人の男2、女2、小児1、前室には成人女1を含む数体分の人骨があった。石室前面で5個体分の須恵器破片が、他の墳裾で土師器の椀と杯が各1出土した。報告書では7世紀前半ないし中葉に比定。銅鏡の出土した点が特記される古墳である。

昭和33年、東京大学(吉田章一郎他)調査。

白山2号墳(86・102・157)

我孫子市白山古墳群中の1基。墳丘をまったく遺存せず、畑地の表土下に横穴式石室が検出された。周堀は未確認。埴輪の散布なし。石室は軟砂岩の切石を用い、内法2.50×1.50mの長方形を呈す。両袖。羨道はなく、玄門外に短い石積みがつくだけで、白山1号墳に似た構造を示す。盗掘が甚しく、玄室内からは直刀1、耳環形銅製品と報告されたもの2が出土したにすぎない。報告書では田中義昭が7世紀中葉、甘粕健が7世紀末と、異った見解を併載している。

昭和33年、東京大学(田中義昭他)調査。

高野山1号墳 我孫子市高野山(102・157)

手賀沼の北岸台地上に所在する高野山古墳群（9基）中の1基。北西面する前方後円墳で、墳丘長35.5m、後円部径21.5m、前方部幅33m、高さは前後とも2mほどをはかる。墳裾に円筒埴輪列が1周めぐり、形象埴輪（人物、馬、盾など）も検出され、これらは墳丘上に置かれていたものと推定されている。周堀ははっきりしない。後円部裾部に2基、くびれ部裾部の両側に各1基、計4基の内部施設があった。いずれも箱式石棺で、ローム層を掘りこんで構築されている。1は軟砂岩を用い、内法で1.7×0.6m、深さ0.65m、刀子1、鉄鏃片5、管玉7、ガラス小玉14が出土した。2も軟砂岩で、1.85×0.60×0.50m。鉄鏃片3が出土したにすぎない。3は雲母片岩を用い、1.90×0.50×0.40mをはかる。成人男女と幼児の3体分の人骨の他、直刀3、刀子3、鉄鏃17以上、ガラス玉22が出土した。4は雲母片岩の割石を小口積みにしたもので、報告者は竪穴式石室としているが、機能的にはやはり石棺とすべきであろう。1.40×1.00×1.00mをはかる。7体分ほどの人骨片と、鉄鏃12点ほどが出土したが、古く盗掘をうけているらしい。報告書では6世紀中葉の所産と考えている。

昭和33年、東京大学（吉田章一郎他）調査。

高野山2号墳（102・157）

我孫子市高野山古墳群中の1基。東西15m、南北20mほどの卵形の墳形を示す。周堀調査が充分でなく墳形がはっきりしないが、前方部の短小な前方後円墳だったものとみてほぼ間違いない。墳丘中段に円筒埴輪列がめぐり、内部施設はくびれ部中央、主軸に直交する箱式石棺で、雲母片岩を用いる。内法は1.60×0.60×0.80m。成人2体、小児1体分の人骨が出土したほか、直刀1、刀子2、鉄鏃7、鹿角製刀子柄1があった。朝顔形埴輪と人物埴輪の一部も検出されている。報告書では6世紀後半に比定している。

昭和34年、東京大学（吉田章一郎他）調査。

高野山3号墳（102・157）

我孫子市高野山古墳群中の1基。封土はほとんど失なわれていたが、墳裾部の円筒埴輪列の基部が15個円形にめぐるのが確認され、径16~17m（埴輪列の径は13m）の円墳と推定された。周堀はない。ほぼ南西に開口する横穴式石室は軟砂岩製、玄室長2.60m、羨道は1mと報告されているが、実測図がなく詳細は不明。盗掘のため鉄鏃片若干が検出されたのみ。報告書によれば6世紀末の所産という。

昭和34年、東京大学（吉田章一郎他）調査。

高野山4号墳（102・157）

我孫子市高野山古墳群中の1基。前方部の短小な前方後円墳で、墳丘長約20m、後円部径21m、前方部幅13mをはかる。前方部はほぼ北面する。墳裾に円筒埴輪列がめぐり、ほぼ1周し

ていたらしい。周堀もめぐるが明確なプランはとらえられていない。内部施設はくびれ部中央に、主軸に直交する方向に箱式石棺が設けられている。内法2.05×0.55×0.60m、絹雲母片岩を用いる。人骨片のほか歯55本が出土し、成人4、幼児1の埋葬が確認された。直刀3、刀子2、鉄鏃片9。人物埴輪の台7基と腕、天冠部分の破片等も出土したが、朝顔形埴輪はなかった。報告書は6世紀後半に比定。

昭和37年、東京大学（尾形禎亮他）調査。

子の神8号墳 我孫子市寿2丁目（157）

未調査。子の神古墳群中の1基。かつて人物埴輪（巫女）が出土している。

子の神10号墳 我孫子市寿2丁目（157）

手賀沼の北岸台地上に存在する前方後円墳1、円墳13基からなる子の神古墳群中の1基。径19m、高さ3mの円墳。幅3.5m程の周堀がめぐるが、崖面にのぞむ南側では外側の立ちあがり認められない。埴輪片が若干検出されたが、本来伴っていたものではないらしい。墳頂部に、ほぼ東西に主軸をとる土壇が2基あり、いずれも2段に鑿たれている。1は、内側の土壇（木棺の大きさを示す）の長さ2.6m。直刀3、鉄鏃約25が出土。2も長さ2.6mで、東端に粘土塊があった。副葬品はごく少量の赤色料のみ。報告書では6世紀前半の所産と推定しているが、副葬品に決め手を欠いておりなんとも言い難い。

昭和42年、東京大学（藤本強他）調査。

金塚古墳 我孫子市根戸（157）

手賀沼の西端近くの台地南縁に所在する。径20m、高さ2m程の円墳で、周堀をもつ。墳頂部の内部施設を円形に囲繞する円筒埴輪列がある。内部施設の構造はまったく不明だが木棺直葬と推定される。後世の攪乱をうけているらしく、出土遺物の配置は不規則である。面径8.15mの勾玉文鏡1、横矧板鋌留短甲1、石枕1、立花1が出土したほか、墳頂部表土直下で須恵器大形甕が破砕して出土し、かなり良く復元されている。墳裾からは完形の土師器碗が出土している。埴輪の総数は60本で、このうち6本が朝顔形、残りはすべて円筒埴輪である。5世紀末葉に比定されよう。

昭和38年、東京大学（甘粕健他）調査。

水神山古墳 我孫子市高野山（157）

手賀沼に面する台地の南縁に所在する。東面する前方後円墳で、墳丘長63m、後円部径32m、高さ5m、前方部幅28m、高さ2.5mを計る。周堀は幅6.5mほどで、墳丘の北半のみ囲繞（南半は斜面となるので外側の立ち上がりがない）。埴輪、葺石なし。後円部中心に、主軸上に長

さ5.1mの割竹形木棺と推定される内部施設もあり、内部から刀子2、針数本、ガラス管玉1、滑石製管玉1、ガラス小玉280が出土。前方部で和泉式の壺か甕の胴部破片が出土しており、報告者は供献土器とみなしている。決め手に欠けるが5世紀中葉頃に比定されよう。

昭和40年東京大学（甘粕健他）調査。

中峠古墳群 我孫子市中峠（230）

古利根川に南接する台地奥部に所在する。中世の中峠城内にとりこまれ、付近はまったくの平坦地であったが、表土下から横穴式石室3、箱式石棺3が検出され古墳の存在が判明した。ただし1基をのぞいては周堀も伴わず、元来墳丘を備えていたかどうか不明である。

1号石室（ローム層を掘りこんだ）は6.9×4.1mほどの長円形の土壇内に設けられた、軟砂岩切石積みの横穴式石室で、南東に開口する。玄室は3.4×1.5mほどの両袖式で、玄門外に切石を1個置くだけの羨道がまったく簡略化されたものである。須恵器破片1点が出土したのみ。石室の背後に幅1～1.5mほどの周堀が弧状にめぐる。

2号石室も5.4×3.7mの土壇内に営まれ、材質、構造、方向とも同じ。玄室は2.6×1.5m。遺物は皆無。

3号石室も同じく4.3×3.2mの土壇内にあり、玄室は2.2×1.3m。遺物皆無。

4号以下の石棺は基底部がわずかに残るにすぎないので、土壇の様相はつかめていない。すべて軟砂岩切石積みの箱式石棺で、主軸をほぼ南北方向にとる。4号は内法で1.7×0.6mをはかる。管玉1、琥珀製棗玉、ガラス丸玉2が床面上で出土。

5号石棺は内法で2.0×0.6mをはかる。須恵器長頸瓶の破片が1点出土。

6号石棺は内法で1.9×0.6mをはかり、遺物皆無。

羨道のまったく退化した横穴式石室の形態からみて、7世紀後半の所産と推定される。

昭和48年、宅地造成に伴い篠丸頼彦、渋谷興平調査。後湮滅。

子の神古墳 我孫子市寿2丁目（19）

子の神古墳群中の1基。径18m、高さ2m程の円墳。内部施設、周堀は未検出。墳裾に埴輪列がめぐり、北半部では0.6m間隔に樹立された円筒埴輪列がよく遺存していたという。南西部には形象埴輪（人物2、馬2）があった。

明治45年、土取りによる破壊に立合って柴田常恵調査。

〔27. 沼南町〕

天神塚古墳 東葛飾郡沼南町岩井（80）

手賀沼西半部の南岸台地上に所在する。周囲には円墳数十基があり古墳群を形成する。径26m、高さ1.4mの円墳と見られたが、周堀が未調査のため本来の形状は不明。西側墳裾にあた

る部位に横穴式石室を検出。砂岩の截石積みで、全長3.7m、玄室2.25m、幅1.73m、羨道長1.45mをはかる。玄室、羨道とも床面に板石を敷く。直刀片1、鉄鏃1塊、刀子片、瑪瑙勾玉1、水晶切子玉3、ガラス小玉10数個、銅環2、鉄製鉸具2、人骨3体分を検出。

昭和29年、国学院大学（樋口清之）調査。

船戸古墳群1号墳 東葛飾郡沼南町大井（43）

手賀沼の西北端部の南側台地上に所在する。大小35基程が群在し、前方後円墳を含む。

1号墳は畑地内にあり原形を損じていた。径15～18m、高さ1m程の円墳と計測されたが、周堀が未調査であり本来の墳形は不明。埴輪はもたない。単室の横穴式石室をもち、玄室は長さ2.25m、奥壁幅1.4mをはかる。羨道は幅0.8m、長さは不詳。石材は貝殻を含む砂岩の截石を用いる。盗掘をうけており、古く直刀2、刀子1、鉄鏃1塊が出土したとされ、調査時には直刀片1、刀子片1、鉄鏃片16が出土したにすぎない。6世紀後半。

昭和25年、国学院大学（古宮隆信他）調査。

船戸古墳群2号墳 東葛飾郡沼南町大井（43）

1号墳の南50mにある円墳で径20～22m、高さ0.8mをはかるが、耕作によって削平されており、本来の形状は不明。埴輪はない。南西に開口する横穴式石室をもつ。単室構造をとるが記述に混乱があり、平面形、規模等判然としない。砂岩の截石を用い、截石は床面にも敷かれる。盗掘にあい、石室自体も損壊をうける。直刀1と鉄鏃、須恵器の破片が出土したのみ。

昭和25年、国学院大学（古宮隆信他）調査。

北作1号墳 東葛飾郡沼南町片山（101）

径17m、高さ約2mの円墳とされる。墳頂下で長さ3.6m、幅1.1m（内法で長さ2.6m、幅0.75mほど）の粘土槨を検出、内部から直刀1、鉄剣1、銅鏃1、鉄鏃3、短冊形鉄斧2、鉈1という副葬品が出土したほか、供献土器16個体が検出された。すべて土師器で、壺6、高杯3、器台3、小形埴4の構成であった。4世紀後半。

昭和34年、早稲田大学（市毛勲他）調査。現存。遺物は、早稲田大学考古学研究室保管。

北作2号墳

北作1号墳の南西20mに所在する前方後円墳で、墳丘長30m、後円部径15m、前方部幅5mをはかる。後円部墳頂下に、主軸に直交する粘土槨2基があった。1号主体は内法長5.5m、幅0.7m、内部から管玉2が出土。2号主体は内法長1.3m、幅0.5mほどと小さく、管玉1を出土。土器の出土は少なく、異形高杯の破片が目立つ程度。北作1号墳とほぼ同時期の所産と目される。

昭和34年、早稲田大学（市毛勲他）調査。

〔29. 白井町〕

真木ノ内古墳群 印旛郡白井町平塚（188・209）

手賀沼の南端部に北面する台地上に所在する。10基足らずの小規模な古墳群で、3基が調査された。いずれも地ぶくれ程度の小墳丘で、周堀は未検出。1、2号とも内部施設は盗掘によって破壊されていたが、軟砂岩製の箱式石棺だったものと推定される。3号も箱式石棺で、これはよく遺存し、内法で長さ1.3m、幅は一端で0.44m、他端で0.18mという、細長い矩形を呈す。出土遺物は、1号墳に直刀片1、石製丸玉2、須恵器（横瓶1、提瓶1、短頸壺1、土師器杯1）が、2号墳に金環1、土師器（甕1、杯2）が、3号墳に土師器（杯1）が残されていた。土師器はすべて鬼高式に比定される。

昭和46年、土取り工事に先立ち熊野正也他調査。後湮滅。

海老内台古墳 印旛郡白井町平塚（133）

手賀沼西南端を北に見る台地上に所在する。調査の端緒となった土取り工事によってすでに封土を失い、箱式石棺が露出していた。当初の墳形、周堀の存否不明。石棺は、ローム層を掘り込んだ2.40×2.10mの方形の土壇内にある。砂岩の切石を用い、側壁で3枚、小口部は1枚の板石を立てて構成する。内法で長さ1.70m、幅は両端で0.70mと0.60m。床面にも板石を敷く。老年男性と幼児の2体分の人骨と、直刀1、鏝1、刀子片2、鉄鏃片13が出土。6世紀後半以降の所産であろう。

昭和40年、下総考古学会（高橋良治他）調査。調査後湮滅。

平塚船戸古墳 印旛郡白井町平塚（177）

手賀沼の南西端部を北に見る台地上に所在する。土取りによって、内部施設付近をのぞいてカットされた後に調査されたため、墳丘のプラン等は不明。砂岩の切石を使用した箱式石棺は、墳丘裾に設けられていたらしく、ローム層を掘りこんだ土壇内にあった。内法で長さ1.95m、幅0.85～0.90m、深さ0.60mをはかる。直刀片2、鏝1、鉄鏃片16、釘(?)1が出土。決め手に欠けるが、6世紀後半以後の所産であろう。

昭和46年、茂木雅博調査。調査後湮滅。

復山谷遺跡周溝址 印旛郡白井町復山谷（331）

印旛沼から流れ出る新川の支流神崎川によって形成された支丘上に所在。標高約20m、水田との比高差約10m。西側の約3分の1を削平されていた。一辺約9.5mの隅丸方形。溝幅1.3～1.8m。深さ約0.55m。北溝に接して1.0×2.5mの土壇を検出。深さは約0.3m。周溝中から弥生時代終末期の東海系土器を出土。

昭和51～52年、千葉ニュータウン計画にともない、千葉県文化財センター（種田齊吾）調査。

〔30. 印西町〕

下総鶴塚古墳 印旛郡印西町小林（215）

利根川の沖積平野を北に見る台地端に所在する。径44m、高さ3mの円墳。裾部に特殊な埴輪があり、約10個体を確認。墳頂部に木棺直葬の土壙3基と五領式土器を利用した壺棺1があった。土壙の規模等は判然としない。第1土壙の副葬品は鉄剣1、直刀1、ガラス小玉7、第2は鉄銚2、同破片1、直刀片2、刀子片1、鉄鏃片3、砥石1、同破片2、ガラス玉10、滑石製小玉30、第3は滑石製小玉140、直刀1、鉄鏃7、砥石片1。壺棺からは滑石製小玉11が出土した。埴輪は円筒と朝顔形に類するものの2種がある。報告者は5世紀前半も中葉に近い時期と考えているが、もうすこし古く見て良いかもしれない。

昭和46、47年、市毛勲他調査。採土工事に伴う調査で、後湮滅。

上宿古墳 印旛郡印西町大森（242）

利根川にのぞむ台地上に所在する。すでに横穴式石室が開口しており、石室の上に若干の封土が遺存するのみで、墳形は不明。周堀は未確認。石室は単室の両袖式で、玄室は長さ2.90m、幅は奥壁で2.50m、玄門際で1.39mと細長い台形プランをもつ。側壁は砂岩切石を8段、持ち送りに積み上げ、高さ2.20m、奥壁は大きな切石2枚からなる。羨道は長さ2m、幅1.40m。側壁石は基部が残るだけで、ほとんど持ち去られていた。玄室の清掃で、人骨片、須恵器小片、鉄器片が出土。6世紀後半以後の所産であろう。本古墳で用いる石材は貝殻を含んだ成田砂層下部の砂岩で、竜角寺古墳群中の岩屋古墳の石室に用いられたものと同じものである。

昭和47年、高木博彦他調査。印西町指定文化財。

小林1号墳 印旛郡印西町小林（263）

利根川の沖積平野を北に見る台地端に所在する。下総鶴塚の同一台地上の西南方に位置する。下総鶴塚をふくめ計6基ほどの円墳で小林古墳群を形成する。1号墳は径16m、高さ2.5mほどの円墳。幅1～1.5mの周堀は西側で途切れ、陸橋をなす。裾部に円筒埴輪列がめぐらされ、陸橋付近には形象埴輪（人物、馬、鶏、猪、牛？）があった。墳頂部表土直下に長さ2.8m、幅1mほどの、木棺を直葬した痕と見られる土壙があり、直刀1、鉄鏃40余、碧玉製管玉11、ガラス小玉5、滑石製棗玉2、硬玉製不整形の玉1が出土した。6世紀後半に比定されよう。

昭和49年、宅地造成に先立ち渋谷興平調査。後湮滅。2、3、4号墳とも同様。

小林2、3、4号墳（263）

小林古墳群に属す。

2号墳は一辺14mほどの方墳と見えるが、後世の改変による可能性もある。高さは3.3m。周堀、埴輪なし。墳頂部に大規模な攪乱墳があり、中から鉄鏃片1、ガラス玉2が出土した。木棺が直葬されたものと思われる。

3号墳は長径13m、短径9.6m、高さ0.6mほどの、長円径を示し、後世の改変が著しい。周堀、埴輪なし。内部施設も未検出。封土の積土状況から見て、古墳だったことは確からしい。

4号墳は径10m、高さ1.8mほどの不整円形を呈す。周堀、埴輪はない。墳頂部のやや南にずれて内部施設があった。長さ2.4m、幅0.8mほどの土壇で、東側小口にうすく粘土が散布していた。内部より鉄鏃片4が出土したのみ。

道作古墳群 印旛郡印西町小林

利根川南岸台地上に所在する。円墳3基からなり、横穴式石室1基が開口している。未調査。

[31. 八千代市]

村上古墳 八千代市村上(236)

印旛沼西端に流入する新川の上流東岸台地上に所在する。封土は明治年間に削平されたと伝えられる。幅2～2.5mの周堀が一周する。南北に細長い方墳で、東西辺22m、北辺14m、南辺17mをはかる。南辺中央に開口する横穴式石室が営まれ、前庭部は周堀外にのびる。石室は軟砂岩の切石を用いる。玄室は長さ1.8m、幅1.6m、高さ2mほどの両袖式。羨道は長さ1.75m、幅1mほど。玄室内から人骨片、銅釧2、勾玉3、須恵器破片若干、羨道から直刀2、鉄鏃100以上、勾玉1、須恵器破片が、前庭部から勾玉2、切子玉4、ガラス玉36、鉄鏃6ないし8、遺存度の良い須恵器破片数個が出土した。7世紀前半に比定されよう。

昭和48年、団地造成に先立ち千葉県都市公社文化財調査事務所(天野努)調査。湮滅。

栗谷古墳 八千代市神野(53)

印旛沼西端に流入する新川の下流、屈曲部の南岸台地上に所在する。神野芝山古墳群の東約500mに位置する。本古墳の西北50mにも箱式石棺が埋没しているという。開墓によりすでに封土を失い開棺済み。寛永通宝が棺内にあったので開棺の時期は古い。緑泥片岩の板石を用いた箱式石棺で、側壁各3、小口各1、床4、蓋3枚で構成。ローム層を掘りこんだ土壇内に設置。変則的古墳であろう。棺内には2体分の人骨、直刀3、鏢3、刀子3、鉄鏃約5、瑪瑙製勾玉1、琥珀製棗玉7、ガラス玉2が遺存していた。6世紀後半以後の所産。

戦時中の開墓に際し再び開棺されたことを聞き、昭和20年大川清調査。昭和47年破壊。

神野芝山2号墳 八千代市神野(189)

印旛沼西端に流入する新川の下流、屈曲部の南岸台地上に所在する。4基の円墳からなり、東方500mには栗谷古墳がある。1号墳は雲母片岩製の箱式石棺が過去に開かれ、人骨、直刀等があったと伝わる。3号墳は未調査。

2号墳はすでに墳丘を失い、地山を掘り込んだ土壌内に営まれた石棺のみ遺存。周堀の調査で径20mほどの円墳と判明、石棺の位置は南西の裾部にあたる。箱式石棺は雲母片岩を用い、内法の長さ2.4m、幅1m、深さ0.85mをはかる。棺内から人骨約10体、刀子、鉄鏃が計10点ほど、勾玉12、琥珀製棗玉13、管玉1が出土。

昭和47年、農作業中棺蓋が落下し人骨が露呈したため、村田一男緊急調査。後埋めもどして保存。

4号墳

2号墳の北100mほど、新川をのぞむ台地端に所在する。調査を何ら経ずに湮滅したが、大正年間に盗掘が行なわれ、粘土を用いた施設内より鏡、刀等が出土したという伝承がある。近年になって土取りのため完全に破壊されたが、削平された後の土面に石枕のおちているのが確認され、現在県立八千代高校に所蔵されている。おそらく本古墳に伴っていたものと思われる。また埴輪の破片も採集されている。伝聞によれば径50m、高さ5mほどの大円墳だったとされ、事実であればきわめて重要な古墳であったことになる。

根上神社古墳 八千代市村上

新川上流から東方に派生する小支谷の北岸台地南縁に所在する。八千代市内唯一の前方後円墳とされ、市指定文化財として保存。未調査であり規模等不明。

七百余所神社古墳

新川上流にのぞむ台地西端に所在する。円墳と推定される。八千代市指定文化財として保存。

〔32. 佐倉市〕

星谷津1号墳 佐倉市岩富(321)

印旛沼に注ぐ鹿島川の上流に面する台地上に所在する。径16m、高さ0.70mほどの円墳。耕作によって削平され、内部施設は流失。木棺が直葬されていたと推定される。埴輪なし。幅5mほどの周堀がめぐるが、西側で途切れ、幅3mの陸橋をなす。また周堀外壁が2ヶ所で外側へ張り出す。周堀底付近でかなり遺存度の良い鬼高式土器数個体が出土した他、覆土中より内部施設から流失したと考えられる碧玉製管玉2が検出された。6世紀前半。

昭和50年、千葉県文化財センター(鈴木道之助他)調査。後湮滅。房総風土記の丘資料館保

管。

山崎ひょうたん塚古墳 佐倉市山崎 (288)

印旛沼西南端部に流入する鹿島川河口の東岸台地上に所在する。かなり変形しているが前方後円墳だろう。墳丘長37m、後円部径23m、高さ7mほどをはかる。前方部先端が削られており、全長は40mほどになる。

昭和50年、市教委により測量調査。佐倉市指定文化財として保存。

飯塚古墳群 佐倉市飯塚 (288)

印旛沼に注ぐ鹿島川の中流にのぞむ台地上に所在する。前方後円墳1、円墳約15からなる。開墾や土取りによってすでに6基が全半壊している。7号墳(径18m、高さ2mほどの円墳)の周堀が確認されたが内部施設や顕著な遺物は未検出。16号墳は昭和30年に宅造のため破壊。その際墳丘裾で箱式石棺2基を検出、うち1基で直刀約13が出土、もう1基は盗掘のため遺物を見ないが、石棺内面に赤色料が塗彩されていたという。この古墳群の成立は6世紀中葉以降であろう。

昭和50年、土取り工事に先立ち7号墳を市教委が調査。

石川1号塚 佐倉市石川 (288)

印旛沼に流入する鹿島川に、河口付近で合する高崎川の西岸台地上に所在する。径21~27mの不整形円で高さは約1.70m。幅の一定しない二重周堀を伴う。墳丘の南東裾部に箱式石棺をもつ。墓壙はローム層を掘りこむ。石棺は片岩系の板石でつくられ、蓋4、側壁各3、小口各1、床石4の計16枚を用いる。5~6体分の人骨があり、うち2体は女性。直刀5、鉄鏃20以上、イタボガキ製の貝釧2が出土。

昭和47年、造成工事に先立ち市教委(海野道義)調査。後湮滅。石棺は根郷公民館に移築。

大篠塚古墳 佐倉市大篠塚 (164)

印旛沼に流入する鹿島川の中流東岸台地上に所在する。調査時に合計7基のマウンドがあったが、6基は近世の塚で、古墳は本古墳1基だけと判明。径15m、高さ2mほどの円墳と見えたが、周堀の探索から前方部の短小な前方後円墳と判明。墳丘長30m、後円部径22m、前方部幅14mで、前方部は西面する。周堀は幅1~2.5mで一周。くびれ部中央に箱式石棺があった。緑泥片岩の板石を用い、内法で長さ1.7m、幅0.75mをはかる。すでに盗掘をうけており、人骨片、直刀片1、刀子片1、鉄鏃片2、銀製の耳環1が検出されたにすぎない。7世紀前半頃か。昭和54年、高速道路建設に伴い村田一男調査。後湮滅。

光勝寺境内古墳 佐倉市臼井 (338)

印旛沼南端部に面する台地上に所在する。光勝寺の境内にあり、全長18mほどの前方後円墳と伝えられる。古墳下がすぐ崖になり、昭和28年に崖くずれを防ぐための工事が行なわれた際、偶然に石枕が検出された。このため出土状況等わかっていない。石枕は緑泥片岩?製で高縁2段立花受孔を20数個もつものという。

石枕は光勝寺蔵。

姫宮古墳 佐倉市馬渡 (85・102)

印旛沼に注ぐ鹿島川上流にのぞむ台地上に所在する。墳丘長23mほどの前方後円墳で、西南面する。墳丘裾と後円部中段に円筒埴輪列がめぐる。北側のくびれ部には形象埴輪(人物、馬)の破片もかなりあった。埴輪は総計40以上になる。内部施設は未検出だが、くびれ部付近に多量の石片があったというから、箱式石棺が破壊されたものと思われる。6世紀後半から7世紀初頭頃に比定されよう。

昭和33年頃、松裏善亮他調査。

江原台遺跡 佐倉市臼井田 (315)

印旛沼南端部に面する台地上に所在する。大規模な集落遺跡である。1、2号方形周溝墓は昭和50年度の調査で検出。1号は軸長9.2×8.6m、溝幅は1~2mで一定しない。大型壺2(うち1は焼成後底部穿孔)、埴型壺2が出土。2号は別遺構との重複ではっきりしないが、軸長11mほどで1号よりひとまわり大きい。大型壺1が出土したのみ。なお、1号と2号は周溝の一辺づつを共有していた可能性が大きい。重複部に後世の別遺構があるため確認はできない。

昭和48年以來、千葉県文化財センターにより継続調査されている。

飯合作1号墳 佐倉市下志津 (329)

印旛沼西南端に流入する手操川の下流西岸台地上に所在する。径15m、高さ1.50mほどの円墳と見えたが、調査の結果墳丘長25m、周堀を含めた全長37m、後方部主軸長14.5m、前方部幅16mの西南面する前方後方墳と判明した。周堀は1周するが幅は一定しない。北側くびれ部横に、周堀が外側へ大きく舌状に張り出す部分があり注目される。墳頂下0.70mで4.05×1.85mの長方形土壇内に取められた長さ3.20m、幅0.45~0.75mの木棺痕を検出、内部からガラス玉3個が出土した。この他封土中で銅鏃2が、墳頂部表土直下で底部を穿孔された壺1が出土した。

昭和51、52年、高等学校建設に先立ち、千葉県文化財センター(沼沢豊他)調査。後湮滅。房総風土記の丘資料館保管。

飯合作2号墳等 佐倉市下志津(329)

飯合作1号墳の西40mにある。2号墳は径20m、3、4号墳は径10mほどの円墳と見えたが、発掘の結果2号墳は前方後方墳、3、4号墳は方墳と判明、さらに3、4号墳に接して方形周溝5基があり、これらがすべて周溝を共有しあい、ひとつづつきの周堀を構成することが判明した。2号墳々丘長30m、周堀を含めた全長36.5m、後方部軸長18m、前方部幅9.20mで、前方部は1号墳同様西南面する。3号墳は一边9.50~12m、4号墳は9~11mとやや小さく、ともにいびつな長方形を呈す。5基の方形周溝は、台状部一边が大は6.5×7.0m、小は4.0×3.8mと大きさがまちまちである。2、3、4号墳、5基の方形周溝とも周堀内から供献土器を数個づつ出土している。

1号墳と同一の機会に調査されたものであるが、上記の状況から重要性が認められ、工事計画を一部変更して、県立佐倉西高等学校々庭内に現状保存。したがって、2、3、4号墳の墳丘内の調査はひかえ、内部施設は未確認のままおわたが、2号墳々頂部は盗掘が甚しく、すでに内部施設は失なわれていると推定される。

飯合作遺跡方形周溝址 佐倉市下志津(329)

飯合作1~4号墳と同一台地上に所在し、同じ機会に調査された。2号墳等と重複したD01~05のほかには18基の方形周溝が検出された。周溝内で検出された土器は、すべて五領式土器である。また底部の穿孔されたものにあっては、穿孔は例外なく焼成後に行なわれていた。

D01 一边約8mの方形。南溝を3号墳と、西溝をD-02と共有する。周溝内から五領式の椀5が出土。

D02 一边約5.5mの方形。北東溝をD-01と、南東溝を3号墳と、西南溝をD-03と共有する。遺物の出土はなかった。

D03 約10×9mの方形。北東溝をD-02と、東南溝を4号墳と、西南溝をD-04と共有する。五領式の小形埴1、椀1が出土。

D04 一边約9mの方形。北東溝をD-03と、東南溝を4号墳と共有する。五領式の壺2が出土。

D05 約6.5×7.5mの方形。東溝を4号墳と共有する。伴出する遺物なし。

D06 台状部軸長11.8×10.9m(東西×南北、以下同)、周溝の幅2.5~3m。周溝内から供献土器(大型壺3、埴形の壺2、甕2、器台2、小型埴1)が出土。

D07 軸長12.3×14mと18基中最大。幅2~3m。周溝内から供献土器(大型壺2、埴形の壺1、甕2、小型埴2)が出土。

D08 軸長5.2×4.9m、幅1m未満と小さい。北側の溝底に組合式木棺を取めたと見られる土壙が検出され、壙底で管玉5、ガラス玉1、水晶玉1が出土。溝中で埴形の壺1が出土。

D09、10、11 この3基は周溝の1辺づつを共有しあい、ほぼ東西一列に並ぶ。D09の北側

の溝底でも土壌が検出され、石製勾玉1、ガラス玉1が出土。土壌の形状から見て遺骸が直葬されたものと思われる。D09は7.5×9.0m、D10は7.0×7.9m、D11は8×8mで、溝幅は2m未満。D09では壺1、椀1、D10では小型埴1、椀1、D11では壺1、小型埴1が出土。

D12 9.7×10.3m、溝幅2～2.5m、供献土器と目されるものは未検出。

D13、14 コーナーの部分で重複しているが、偶然の切り合いの可能性もある。13は8.8×9.3m、溝幅2m未満、D14は7.4×7.3mで溝幅1m以下とやや小さい。D13では壺3、甕2、小型埴2、器台1が、D14では埴1が出土した。

D15、16 D15以下の9基は上記各址とは占地を異にし、土器の様相にも幾分古期の様相をとどめる。D15は6.8×6.0m、D16は7.4×7mで溝幅はともに1m程度。D15では埴形の壺1、祖製の大型壺1、D16では器台1、椀1が出土。この2基は周溝の一边を共有し、南北に並ぶ。

D17、18 この2基も周溝を共有し、南北に並ぶ。D17は8.2×7.3m、D18は12×10.2mと大きい。D18は南東のコーナーが陸橋をなす。D17には供献土器がなく、D18では埴形の小形壺1が出土したのみ。

D19 8×8.2mで溝幅1m前後。壺4、甕1が出土。

D20 11.9×10.7mで溝幅1m、西辺中央は2m近くにふくれる。その部分に供献土器があった。大型の壺3、台付甕1が出土。

D21、22、23 この3基は周溝を共有し東西一列に並ぶ。3基とも南半分を失っており正確な規模不明。D21は一边7.7mほど、D22は5.5m、D23は5mほどで、溝幅も狭い。D21で壺1、甕1が出土した。

石神第I地点2号墳 佐倉市臼井(266)

印旛沼南西端部の南岸台地上のやや奥部に所在する。高さ2.30mほどの墳丘を残すが、かなり破壊され、周堀の調査も十分でないので、正確な墳形、規模不明。墳丘南側裾部に長さ4.30m、幅1.50m、深さ0.40～0.50mの長方形の土壌があり、内部から直刀2、刀子3、鉄鏃約10が出土した。

昭和48年、伊礼正雄、熊野正也他。宅地造成に先立ち調査され、後湮滅。同1号墳は内径21m、外径31mの円形周堀のみ検出、3、4、5号墳は古墳と断定できない。

臼井南遺跡渡戸A地点 佐倉市臼井(266)

印旛沼南西端部にのぞむ台地上に位置する臼井南遺跡(群)中に所在する。台状部一边9.5～10m、溝幅1.5m、深さ0.8mほどの、きっちりした正方形を呈する。出土遺物は皆無で、古墳時代の所産かどうかとも判然としない。

臼井南遺跡(群)は、宅地造成に先立ち伊礼正雄、熊野正也他によって昭和48年調査され、

後湮滅。

白井南遺跡渡戸B地点 (266)

白井南遺跡(群)中に所在する。方形周溝は2基あり、1は台状部1辺15.2×12.8mの長方形で、溝幅は1mほど。周溝覆土中から、肩部が楕円文で飾られ、頸部に突帯のめぐり、東海地方西部の影響を強く示す壺が2点出土した。2は長辺16m、短辺15mほどのやや菱形状にゆがむ長方形を呈す。東南コーナーが陸橋をなす。顕著な出土遺物を見ない。

萱橋遺跡周溝址 佐倉市上座字萱橋

井野川に面する台地上に所在。標高約26m。水田との比高差約11m。

1号址

9×9.8mのほぼ方形、溝の深さは0.2～0.5m。幅は0.9～1.1m。埋葬施設らしきものなし。出土遺物なし。

2号址

5.4×5.6mの隅丸方形。溝の深さ0.15～0.25m、0.7～0.8m。埋葬施設らしきものなし。須恵器高杯片出土。

3号址

東西溝長6.0m、南北溝長5.75m。幅は0.5～0.6m、深さ0.2～0.4m。埋葬施設らしきものなし。出土遺物なし。

西ノ台遺跡1号址 佐倉市小竹字西 (291)

井野川に面する台地上に立地する。7×7.65mのほぼ方形。溝の深さは0.2～0.24m、溝幅は0.85～1m。埋葬施設らしきものなし。出土遺物なし。

昭和50～51年、佐倉市教育委員会調査。

大崎台遺跡周溝址 佐倉市六崎 (216)

印旛沼から流れ出る鹿島川とその支流の高崎川によって形成された舌状台地上に立地。標高約30m、水田との比高差約15mをはかる。

1号址

四隅の切れた形態で、溝長東6.7m、南8m、北6m(現存長)、いずれも幅は0.6～0.9m、深さ0.6m。台状部は東西9.2m、南北9.4mで、中央に主軸をほぼ東西にもつ長軸2.5m、短軸1.4m、深さ0.7mの土壌を検出。南溝北端の深さ約0.6mの位置で、転落したのではないと推定される状態で、弥生時代後期の壺形土器が出土。

2号址

北東溝長10.4m、東南9.2m、南西9.4m、幅は0.3~0.5m、深さ0.15~0.3mほど。台状部は約9.7×8.4m。西隅一か所にブリッジを有す。

昭和48年、佐倉市教育委員会（米内邦雄他）調査。

生谷境堀遺跡周溝址 佐倉市生谷字境堀（300）

印旛沼をのぞむ小丘陵上に立地。標高約30m。

1号址

長辺13.6m、短辺12.9mの方形。溝幅1.9~1.5m、深さ0.7m、溝の断面は逆台形。台状部は10.3×9.7m。内部施設なし。溝中から須恵器杯が出土。

2号址

一辺7.2mのほぼ正方形。溝幅1m、深さ0.8m。台状部は約5.2m四方。台状部中央部にわずかに盛土らしきものが存在する。内部施設なし。

昭和48年、桑原護調査。

生谷遺跡A地点周溝址 佐倉市生谷（300）

石神遺跡、渡戸遺跡と小支谷をはさんだ対岸に所在。

1号址

東側半分は調査区外。一辺約4.7mの方形と推定。溝幅0.5~0.7m。出土遺物はなし。

2号址

10.3×9.1mの東西につぶれた形を呈す。溝の深さ0.3~0.45m。出土遺物はなし。

3号址

13×12.2mのほぼ正方形。深さ約0.6m。台状部の中央に長径4m、短径2.32mの掘込みがあり、その内側に2.2×1.3mの長方形の土壌が検出された。深さ1.8m。土壌の長軸に直交する形で、3本の溝が掘られている。内部からは遺物の出土なし。南側溝から須恵器長頸壺と杯が出土。

4号址

6.55×6.1mの南側のややせまい方形。台状部は一辺約5mの方形。溝の深さ0.7~1.0m。出土遺物はなし。

5号址

4.84×4.68mのややゆがんだ方形。溝幅0.72~0.92m。深さ0.28~0.44m。出土遺物はなし。

6号址

6.72×6.4mのいびつな方形。台状部は3.2×3.08m。溝幅は1.16~1.4mが、深さは0.48~0.56m。溝は内側にテラス状の段を有す。出土遺物はなし。

7号址

4×3.48mのいびつな方形。台状部は2.4×2.24m。溝幅は0.6～0.9m、深さ0.2～0.32m。
出土遺物はなし。

8号址

5.36×5.18m方形。台状部は2.6×2.6mの正方形。溝幅1.16～1.42m、深さ0.44～0.56m。
出土遺物はなし。

昭和51年、白井、生谷地区土地区画整理事業にともない、(田川良外)調査。

飯重新畑遺跡周溝址 佐倉市飯重字新畑(246)

標高約30mほどの尾根上に所在。

1号址

南北6.8m、東西5.8mの方形を呈す。溝幅1.3～1.5m、深さ約0.3m。溝底はほぼ平坦。内部施設はなし。時期不明。

2号址

東側に開く「コ」字形。南北溝長6.4m、溝幅0.8m、深さ0.1m。時期不明。

[33. 四街道町]

千代田遺跡周溝址 印旛郡四街道町千代田(208)

1号址

南北9.4m、東西8.5mの長方形。長軸を南北にとる。溝幅1.0～1.3m。溝は全周。南溝の中央よりやや西側に長径1.15m、短径0.3m、深さ0.2mの楕円形の土壙を検出。内部施設なし。

2号址

南北6.75m、東西6.8mのほぼ方形。溝幅0.7～1.2m。北西コーナーに長径0.5m、短径0.35m、深さ0.25mのピットが存在。台状部は4.8×4.8mの方形。内部施設なし。

3号址

南北6.9m、東西6.8mの隅丸方形。溝幅0.5～0.8m。台状部は5.6×5.5m。内部施設なし。北溝内より須恵器の甕が出土。

4号址

南北6.7m、東西6.7mの隅丸方形。溝幅0.85～1.2m。台状部は4.5×4.3m。周溝内より須恵器長頸壺の頸部が出土。内部施設なし。

5号址

南北3.4m、東西3.7mの隅丸方形。溝幅0.5～0.9m、深さ0.2m。北溝の中央部にブリッジを有す。西溝内に0.3m、深さ0.1mのピットがあった。内部施設なし。

6号址

南北4.7m、東西5.1mの隅丸方形。溝幅0.7～0.9mで、深さは0.2m。台状部は3.5×4.4mほど。内部施設なし。

7号址

南北3.8m、東西4.15mの隅丸方形。溝幅0.65～0.85m。台状部は2.7×2.6mほど。内部施設なし。

昭和46、47年、団地造成に先立ち八幡一郎調査。後湮滅。

〔36. 富里村〕

烏山2号墳 印旛郡富里村(265)

松ノ木台2号墳のほぼ500m南に所在する。径27m、高さ3mほどの墳丘を遺存。幅1.50mほどの周堀がめぐり、周堀内壁の径は23mであった。墳頂部やや南寄り、表土直下から横矧板鋌留短甲1、鉄剣1、鉄鏃3が出土した。土壌のプランはつかめていないが、木棺が直葬されていたものであろう。また墳丘南側の中腹から裾部にかけて多量の須恵器、土師器が出土した。須恵器は有蓋高杯13(身8、蓋5)、壺破片1、土師器は埴形の壺と短頸壺各1等である。5世紀後半に位置づけられよう。同1号墳は径20mほどの円墳で、周堀を伴うが内部施設未確認。

昭和48年、浜田徳永他調査。宅地造成に先立ち調査され、後湮滅。

松ノ木台2号墳 印旛郡富里村松ノ木台(265)

印旛沼東岸台地のやや奥部に所在する。墳丘はごくわずか遺存するのみ、周堀の全堀によって当初の規模を確認。16×17mの、ほぼ正方形の方墳で、周堀は幅2～3mで1周する。墳丘の南辺中央に開口する横穴式石室をもつ。玄室は両袖で、長さ2.22m、幅は奥で1.12m、前で0.90m、高さは1.60mをはかる。羨道は省略されている。周溝内から刀子3と、海獣葡萄鏡と目される径62mmの小型鏡1面が出土。7世紀もかなり降る時期の所産であろう。

昭和48年、浜名徳永他調査。宅地造成に伴い調査され、後湮滅。同1号墳は近世の塚と判明。

日吉倉遺跡Ⅱ区(265)

烏山2号墳と同一地区内にある。円形周溝墓2基が検出されている。

1号は台状部径9.4m、周溝外径12m、深さ0.3～0.4mの正円形。

2号は9.6m～13.5m、深さ0.3～0.4m。ともに出土遺物はなく、年代、性格不明。

昭和48年、浜名徳永他調査。

日吉倉遺跡 印旛郡富里村日吉倉(165)

印旛沼に流入する根木名川の西岸台地上に所在する。3基の方形周溝址が相接して検出された。

1号は台状部軸長10×8mほどの長方形、溝幅は2mほどではほぼ一定、溝内から壺2、甕1と焼成前に穿孔された甕か壺の底部1等が出土。

2号は1号の周溝と一部重複する。8×6.5mほどの長方形で溝幅1mほどと小さい。

3号も6×6mと小さい。北側の溝底に長さ2m、深さ0.2mほどの細長い土塊があったが遺骸の埋葬施設との確証は得られなかった。2、3号とも顕著な出土遺物はなかった。

昭和45年、道路建設に先立ち栗本佳弘調査。後湮滅。

日吉倉遺跡IV区(265)

昭和45年調査地のすぐ北側の台地上に所在する。台状部径12m、周溝外径16m、溝の深さ0.2~0.3mの円形周溝1基が検出された。溝底で鬼高式と見られる甕1点が出土している。

昭和48年、浜名徳永他調査。

[37. 印旛村]

山王古墳 印旛郡印旛村吉高(317)

印旛村の北端部西岸台地上に所在する。南面する前方後円墳で、墳丘長約30m、後円部径15m、前方部幅13mほどをはかる。くびれ部を横断し、後円部東裾を削ってのびる後世の溝による破壊が著しい。裾部に円筒埴輪列がめぐるが、基部の残るものは少ない。後円部墳頂に絹雲母片岩を使った箱式石棺があったが、盗掘で徹底的に破壊されていた。金銅製耳環1、刀子片2、鞆尻金具1が出土。円筒埴輪の他、人物埴輪の一部と推定される破片若干が見られる。

昭和52年、三浦和信他調査。採土工事に伴う調査であり、後湮滅。

[39. 栄町]

岩屋古墳 印旛郡栄町竜角寺(166・345)

印旛沼の北東岸台地上に所在する。前方後円墳22、円墳4、方墳2からなる竜角寺古墳群中の1基。同古墳群中の東南部に位置する。一辺80m、高さ12.4mの大方墳で、3段築成をなし、墳頂部平坦面は東西17m、南北19mをはかる。幅3m前後の周堀がめぐるとみられる。南辺墳裾部に墳丘主軸をはさんで2基の横穴式石室が古くから開口。東石室は北20度西をさす両袖式で、凝灰質砂岩の切石を用い、石室全長6.45m、玄室長5.8m、奥壁幅2.41m、中央部幅1.14m、玄門部で1.14m(推定)をはかる。高さは3m前後。羨道は元来付設されなかった公算が高い。奥壁に接し石室主軸と直角に床面より一段高く棺台を設ける。西石室は東よりやや小型、プランは類似する。全長4.8m、玄室長4.18m、奥壁幅1.64m、玄門部幅1.38m高さ2.2m前後をはかる。同様奥壁に接して棺台を設ける。羨道はもともと省略されていたと

みられる。古くから開口しており、副葬品は知られていない。天皇陵にも必敵する大型方墳であり、終末期古墳として房総の古墳史上重要な位置をしめる。7世紀後半。

昭和45年、明治大学（大塚初重）測量調査。昭和16年、国指定史跡。

竜角寺111号墳（54）

径25m、高さ3mほどの円墳で、墳丘の南側裾部に箱式石棺をもつ。緑泥片岩の板石を用い、側壁各3枚、小口各1枚、蓋石4枚よりなり、床面にも大小不ぞろいの板石が敷かれる。内りりの長さ1.60m、幅0.90mほどをはかる。蓋石上に直刀1があったほか、棺内で須恵器、土師器破片若干、人骨片を検出。盗掘にあったものと思われる。

昭和28年、玉口時雄、久保哲三調査。

竜角寺112号墳（54）

111号墳の北東95mに位置する。径26m、高さ約3mの円墳で、南側の墳丘裾に箱式石棺をもつ。緑泥片岩の板石を用い、側壁各3枚、小口各1枚、蓋石5枚よりなる。内りりで長さ1.64m、幅0.98mをはかる。盗掘にあい、出土遺物は皆無であった。

昭和25年頃、滝口宏調査。

竜角寺92号墳（57号墳）（128）

岩屋古墳の北西30mに位置する径27m、高さ3mの円墳。南東裾部に開口する横穴式石室をもつ。砂岩の載石積みで、全長2.9mと小さく、玄室は平面ほぼ正方形の両袖式。玄室内から人骨1体分、直刀1、砥石2、馬具の一部と見られる金具1、須恵器長頸壺1が出土。

昭和40年、中村恵次調査。

〔40. 成田市〕

瓢塚古墳群 成田市橋賀台、米野、郷部、弁須（260）

利根川に流入する根木名川の支流小橋川と、印旛沼に流入する江川に挟まれた台地上に所在。

9号墳

一辺16m、高さ1.5mの方墳で、幅3mの周堀が一周する。外部施設、内部施設とも検出されず、周堀底から完形の土師器壺2が出土。4世紀に属すると推定。

12号墳

一辺15m、高さ1mの方墳で、幅2.5～3mの周堀が一周する。外部施設なし。内部施設は中央部の旧地表面にて落込みを検出。付近で刀子1が出土しているため、これを施設と推定。終末期に属すると報告しているが、遡らせてもよいのではないか。

15号墳

長径22m、短径18m、高さ1m強の楕円状を呈する円墳で、幅4m強の周堀が一周する。外部施設はない。内部施設は、墳頂部近くで長さ2.8m、幅1.1mの木棺直葬遺構を検出。中から刀子1が出土。6世紀の築造と推測される。

16号墳

一辺13.5×11.5m、高さ1m弱の方墳で、幅1.5～2.5mの周堀が一周する。外部施設はない。内部施設は、中央部の旧地表面直上における木棺直葬遺構と推定。仿製変形四神鏡1が出土。また、周堀から小形壺1出土の報文があるが、図がないため不詳。後期の築造と報告しているが、遡らせてもよいのではないか。なお、鏡は、報告書の挿図では17号墳の出土とある。

17号墳

船塚古墳（前方後方墳）を対岸にのぞむ台地上に立地。径25m、高さ2.5mの円墳で、幅6m弱の周堀をめぐらす西側は切れている。外部施設はなし。内部施設は検出されなかったが、墳頂部近くの封土中から乳文鏡1が出土しているため、木棺直葬遺構と推測される。また、墳丘西裾から鉄斧1が出土。なお、墳丘下に和泉期の住居址を検出したと報告している。5世紀後半ないしは6世紀前半の築造と推測される。

18号墳

径8m、高さ0.5mの円墳で、幅2mの周堀が一周する。外部施設、内部施設とも検出されず。墳頂下から鉄片1が出土。なお、墳丘下に和泉期の住居址3軒が検出され、周堀がこれを切っている。6世紀に属すると推測される。

19号墳

径10m、高さ0.5m強の円墳で、幅2.5mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、復元長3m、幅0.9mの粘土を使用した木棺直葬遺構と推定される。この外から、鐔付直刀1、ガラス小玉1が出土。墳丘下に和泉期の住居址が検出された。6世紀に属すると推測される。なお、挿図には刀子1、茎2の報告があるが不詳。

20号墳

径19m、高さ2mの円墳であるが、幅2mの周堀が西側で約5m切れ馬蹄形の周堀を示す。また、封土と周堀の間に幅1m強のテラスを設ける。外部施設、内部施設、遺物とも検出されず。あるいは、円墳でなく、導入初期の前方後円墳と把えることができるのか問題が残る。

21号墳

径16m、高さ1mの円墳で、幅2～3mの周堀を半円状にめぐらせている。外部施設、内部施設とも検出されず。周堀への流入土中から須恵器杯片1出土。須恵器片は比較的古式である。6世紀前半に属すると推測。

22号墳

長径18.5m、短径17m、高さ1mの円墳で、幅2.5mの周堀が一周する。外部施設はなし。

内部施設は、旧地表面から0.85m上に粘土を使用した木棺直葬遺構と推測される。この付近から短剣1、刀子1が出土。5世紀後半ないし6世紀初頭に属すると推測される。なお、報文には刀子片2とあるが、挿図では1個体分と推定している。

23号墳

径10m、高さ0.6mの円墳で、幅2mの周堀が一周すると推測される。外部施設はなし。内部施設は木棺直葬遺構と推定されたが、詳細不明。付近から鉄鍔片1、刀子片1が出土と報文にあるが、挿図なしで不詳。6世紀前半までに属すると推測される。

27号墳

北辺22m、南辺25m、東西辺19m、高さ1.8mの長方形を呈する方墳で、幅2mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、南辺の中央部に開口する横穴式石室で、旧地表下に掘られた土壌内に、軟砂岩の切石を全長6.3m、幅1.3mの複室となるよう構築している。石室内からは、鉄片（剣?）と金銅片が、石室上からは須恵器長頸瓶1、片刃箭（?）の鉄鍔20が、前庭部にあたる周堀から須恵器長頸瓶1が出土。8世紀初頭と報告しているが、築造は7世紀後半とするのが妥当であろう。

29号墳

径16mの円墳で、幅3.5mの周堀が一周する。墳丘は消失しており、外部施設はなし。内部施設は、粘土を用いた長さ3.3m、幅0.8mの木棺直葬遺構で、剣1、刀子片1、片刃箭の鉄鍔1、棘被篋式鉄鍔15、大形平根鉄鍔2が出土。6世紀初頭に属する。なお、挿図にさらに2つの土壌を図示しているが、内部施設かどうか不詳。

30A号墳

径14m、高さ0.4mの円墳で、幅3mの周堀がめぐる。外部施設、内部施設は検出されず。周堀から土玉が出土しているが、古墳に伴うものか不明。時期不明。

30B号墳

径14.5m、高さ0.3mの円墳で、幅2.5～3mの周堀が一周する。封土は消失していたため、外部施設、内部施設、遺物は検出されず。時期不明。

31号墳

径15m、高さ1m強の円墳で、幅2.5mの周堀がめぐる。外部施設、内部施設、遺物とも検出されず。時期不明。

32号墳

径26m、高さ2.5mの円墳で、幅7mの周堀が一周する。外部施設は周溝の一区画に、人物埴輪1（女）、動物埴輪2（鳥）、円筒埴輪10（朝顔1、円筒9）が検出された。内部施設は、墳頂下に2つの木棺直葬遺構が検出され、第1施設は長さ6.1m、幅0.7m、第2施設は長さ3.6m、幅0.7mをはかる。第1施設から、石枕1、立花片1、鉄鎌1、刀子3、鉄鍔7、土師器杯1、同高杯1、滑石片が、第2施設から、剣1、滑石片が出土。墳丘下、周堀に和泉期の住

居址を検出しており、鬼高期の土師器、石枕、埴輪から6世紀後半ないし7世紀初頭と報告しているが、6世紀前半に遡るものであろう。

33号墳

長径18m、短径16m、高さ1m強の円墳で、幅2.5～4mの周堀がめぐる。外部施設なし。内部施設は、墳頂下に長さ2m、幅0.6mの木棺直葬遺構を検出。中から、銅釧1、刀子1、鉄鏃4種14本が出土。古墳時代末期と報告しているが、6世紀前半ないし中葉に属すると推測される。

34号墳

径11m、高さ1m強の円墳で、幅3.8mの周堀がめぐる。外部施設、内部施設、遺物とも検出されず。挿図は、鉄鏃1のみの報告あり。

35A号墳

径9m強、高さ1m弱の円墳で、幅3mの周堀がめぐる。外部施設なし。鉄鏃1が墳丘中から出土しているため、内部施設は木棺直葬遺構と推測される。鉄鏃は新しく、6世紀後半ないし末葉に属すると推測される。

35B号墳

径10.5m、高さ0.5mの円墳で、幅2～3mの周堀がめぐる。外部施設はなし。墳丘中から鉄鏃片が出土しているため、木棺直葬遺構と推測される。後期に属すると報告している。

36号墳

一辺10.5m、高さ0.7mの方墳で、幅1.5mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、南辺中央部の旧地表下に掘られた土壌に構築された単室の横穴式石室で、軟砂岩の切石を使用している。石室内から人骨片が出土。また、前庭部から須恵器長頸壺1、平瓶1が出土。7世紀前半に属すると推測される。

38号墳

東西辺22m、南北辺29m、高さ1m弱の方墳で、幅2mの周堀がめぐる。外部施設はなし。内部施設は、南辺中央部の旧地表下に掘られた長さ5.5m、幅5mの土壌に構築された単室の横穴式石室で、軟砂岩の切石を用いており、長さ2.7m、幅2.1mをはかる。石室内から金環1が、周堀底から須恵器長頸瓶片1が出土。7世紀後半に属すると推定される。

39号墳

一辺23.5m、高さ2.5mの方墳で、幅2.5～3mの周堀が一周する。また、封土と周堀の間に幅3mのテラスが認められる。外部施設はなし。内部施設は、南辺中央部の旧地表下に掘られた土壌内に構築された複室の横穴式石室で、軟砂岩の切石を使用しており、長さ4m、幅1.4mをはかる。石室上部から須恵器長頸瓶1が、前庭部から刀子1、鉄製壺釧2、円環状鏡板付釧1、鉸具2が出土。7世紀中葉から後半に属すると推測される。

40号墳

東西辺10m、南北辺14m、高さ1 m弱の方墳で、幅2 mの周堀が一周する。南辺は幅6 mにわたり1 m外側へ張り出している。外部施設はなし。内部施設は、南辺近く構築された箱式石棺で、片岩を用いており、長さ1 m、幅1 mを測る。石棺上から方頭大刀1が、石棺内から木芯金銅張把頭、鋌付銅板、金糸が、周溝から、鈴3、鉸具2、須恵器大甕1が出土。なお、鉄鍔1の出土を示す挿図がある。また、周堀内から、墳丘下の住居址に伴うと考えられている和泉式土師器の出土が認められた。7世紀前半に属するものと推測される。いわゆる変則的古墳に属する。

41号墳

北辺12m、南辺14m、東西辺16m、高1.3mの方墳で、幅2 mの周堀が一周する。また、封土と周堀の間に幅1 mのテラスが認められる。外部施設なし。内部施設は、南辺中央部の旧地表下に掘られた土壌内に構築された単室の横穴式石室で、片岩を用いており、全長2.8m、幅1.1mをはかる。石室内から須恵器平瓶2、短頸壺1、直刀1、鉄鍔、轡片(?)が、羨道部から大刀拵金具、鉸具2、轡片(?)が出土。終末期と報告しているが、7世紀前半か若干遡る時期に属しよう。なお、この石室は、箱式石棺に羨道部を加えた形態で、箱式石棺の系譜をひくものであることは明確である。また、いわゆる変則的古墳に含めてよいか問題を残す。

42号墳

一辺13m、高さ1 m強の方墳で、幅3 mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は南辺の中央部に長さ6 m、幅5 m前後に掘られた土壌内に構築された単室の横穴式石室で、旧地表下に位置し、軟砂岩の切石を用いており、長さ3.7m、幅1 mをはかる。石室上から須恵器平瓶1が前庭部から周堀にかけて須恵器片が出土している。7世紀前半に属すると推測される。

43号墳

径13mの円墳で、不整円形に近く、幅2 mの周堀が一周する。封土は消失しており、外部施設、内部施設、遺物は検出されず。

44号墳

一辺10.5~11mの正方形に近い方墳で、封土は消失しており、幅1.5~2 mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、南辺の中央部の旧地表下に、長さ2.2m、幅1.4mに掘られた土壌内に構築された単室の横穴式石室で、片岩を用いており長さ1.6m、幅0.6mをはかる。羨道から周堀にかけて須恵器長頸瓶が出土。7世紀前半から中葉にかけての時期に属すると推測される。石室は片岩を用いており、箱式石棺の系譜をひくものであることは明確であろう。

45号墳

一辺9 mの方墳で、封土はわずかで、幅2 mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、南側周堀内に土壌が認められたが性格不明。周堀内から土師器甕が出土。5世紀に属すると推測される。

46号墳

一辺12m、高さ0.7mの方墳で、幅2mの周堀が一周する。外部施設なし。墳頂下に白玉が出土しており、木棺直葬遺構と推測される。5世紀代と考えられる。

47号墳

一辺10.5~12m、高さ0.8mの方墳で、幅1.5~2mの周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、長さ6.7m、幅1mの木棺直葬遺構で、剣1、刀子1、白玉186が出土。後期と報告しているが、5世紀に属すると推測される。

48号墳

一辺11~12m、高さ0.6mの不整形な方墳で、幅2.5mの周堀が一周する。外部施設はなし。周堀隅部に長さ2m、幅0.5mの土壇があり、内部施設とも考えられる。封土から鉄鏃が出土。5世紀の所産であろうか。

以上、昭和44~46年、千葉県北総開発公社文化財調査事務所調査。成田ニュータウン建設のため湮滅。資料は房総風土記の丘資料館保管。

天王・船塚古墳群 成田市台方、山口他(123・260)

瓢塚古墳群の北につづく台地上に所在する。瓢塚古墳群との境界は不分明であり、古墳群としてのとらえ方に問題があるが、ここでは調査当時の分類に従っておく。調査前に前方後円墳2、前方後方墳1(船塚)、円墳30を確認。

4号墳

径21mの円墳で、幅4~8mの周堀が2重にめぐる。外部施設はなし。内部施設は南に開口する単室の横穴式石室で、旧地表下に位置し、6×8m程の土壇に軟砂岩の切石で構築されており、長さ5.2m、幅3.5mをはかる。直刀3、刀子1、鉄鏃6、壺鏡2、轡2、帯金具その他が副葬され、周堀および前庭部から土師器高杯、須恵器長頸壺が出土。7世紀前半と報告しているが若干遡らせてもよいであろう。埴輪窯の操業、工房址の存在と関連すると見られている点が、また、南側の石室面に位置する周堀形態が注目される。

5号墳

径18mの円墳で、幅5~7mの不整形の周堀がめぐる。断面図では2重周堀の可能性があり。外部施設はなし。内部施設は、墳頂部に長さ2.5m、幅0.9mの木棺直葬施設を認め、剣5、直刀1、鉾1、鉄鏃17が出土。6世紀前半と推定される。

8号墳

墳丘長29m、後円部径25m、前方部幅15mの前方部の短い前方後円墳で、幅2.5~3mの墳丘相似形の周堀が一周する。外部施設はなし。内部施設は、くびれ部に構築された箱式石棺の系統をひく石室で、天井石に片岩、側壁に軟砂岩の切石を用いており、内法長2.1m、幅1m強をはかる。石室内から刀子5、鉄鏃31、勾玉2、喪玉2、金銅鈴2、歯が、天井石上から刀子1が、石室周辺から提瓶などの須恵器が出土。6世紀末葉から7世紀初頭の時期に属すと思わ